無料体験版　　正義派の妻

　目標データ

目標　ｙ
性別　女
年齢　３０歳９カ月
婚姻　既
出産　１
学歴　Ｎ大学経済学部卒
病歴　無
身長　１６３ｃｍ
体重　５４ｋｇ
眼鏡　無
ピアス　無
胸部　やや豊
臀部　豊
頭髪　黒　鎖骨、肩甲骨に届く。前髪、少。染色、パーマなし。

監視データ

体制　ＡＡＡ
時間　全日　（0'00'00 - 23'59'59）
範囲　全域
重点　異性交友、消費行動
録画　性交、入浴、放尿、排便、衣類の脱着、生理具の脱着
録音　全会話（寝言、独り言を含む）

監視ログ

****134352　目標ｙ、目標ｚ、帰宅路。経路に変化なし。

　ｚ「パパ、来なかったねえ」
　ｙ「そうだねえ、パパ、来られなかったねえ」
　ｚ「お仕事、忙しいんだよ、きっと」
　ｙ「そうなんだ。本当は明日香のこと、見たかったんだけどね」
　ｚ「ママはさ、どうしてパパと結婚したの？」
　ｙ「ん？　……さあ、どうしてかなあ。好きだからじゃないの、やっぱり」
　ｚ「じゃ、明日香もマキ君のこと、好きだから、結婚するね」

　y「かまわないけど、小学校にも格好いい男の子が一杯いるから、見てから決めなさいよね」
　z「あっ、黄色いチョウチョだ！」

　　以下省略

監視車内ログ

　「しかし、母娘の会話って、こんなもんなんすかねえ？」
　「ふん、女なんてものはなあ、男なしじゃ生きていけねえ動物なのさ」
　「へへ、それってひどい女性蔑視ですよ」
　「ひどいって、お前、事実なんだからさ。だいたいお前に言われたくないね」
　「それじゃ、僕がまるで男尊女卑主義者みたいじゃないっすか」
　「え、違うの？」
　「やだなあ、僕はただの変態ですよ」
　「どこが違うんだ？　同じだろうがよ」
　「それにしても、見れば見るほど、このおかあちゃんの頬っぺたはいいなあ」
　「出たよ、出ちゃったよ、頬っぺたフェチ野郎が」

「うーん、あの頬骨のあたりの肉付きの具合なんか絶品ですよ」
「胸とかケツとか、まともな所に興味ねえのかよ。あいつだって、けっこうナイスバディだぜ」
「身柄を拘束したあかつきには、必ず、僕にビンタさせてください！」
「そりゃ、ビンタくらい、いくらでも出きるけどよ。俺は嘆かわしいよ、こんな若者ばかりで日本の将来はどうなるのかねえ、まったく」
「十手の先端で頬っぺたをグリグリ抉ってやりますよ。二本で左右から同時に抉るのもいいなあ。顔が瓢箪みたいになって……。ああ、早く逮捕してえー！」
「ついていけねえよ、思想部も変わったぜ」

以下省略

****141308　目標ｙ、目標ｚ、帰宅。尾行班から走査Ａ班へ任務継続。

****192433　目標ｘ、帰宅。

第一章　ママの幸福

　結婚の祝いとして、友人一同から贈られた珈琲メーカーがゆっくりと茶色の液体を落としていく。――
　いつもなら、その緩慢な行程を眺めつつ、祝福に包まれた結婚式当日の記憶でも思いだすところだが、今夜の夏代は少し機嫌が悪い。テレビの前に座ってアニメ番組を見ている娘の明日香の小さな後ろ姿。普段どおり、明るく声を上げて笑っている。けれど、それは彼女が辛抱強い、おっとりとした性格に育っているからで、内心、少なからず傷ついているのは間違いなかった。母親の夏代には痛いほどわかるのである。明日香はこの日、通い親しんだ幼稚園の卒園式を終えてきたばかりだった。幼いながらにも、その晴れ姿を母親ばかりでなく、父親である貴文にも見てもらいたかったはずである。じっさい日頃忙しい父親も卒園式には出席すると、一週間前は固く約束していたのだ。しかし当日の今日、会場にはやはり父親の姿はなかった。キョロキョロして父親を探す娘の頭を撫でながら、何度も何度も口にしている台詞を、夏代はまた口にしなければならなかった。
　「パパはお仕事でね、どうしても出てこられないんだって――」
　その時の明日香の悲しげな表情ときたら……。もちろん、裁判官という貴文の仕事の重要性はいまさら言うまでもないところで、夏代も承知しているのだが、こんな顔を幼い子供にさせるのは親として忸怩たる思いを抱か

ざるを得ないのだ。
　（できないことを約束するからいけないのよ）
　貴文の安請け合いを夏代は心の中でなじった。しかも、つい一時間前、帰宅した貴文の態度は輪をかけて妻と娘の神経を逆撫でした。帰るなり、書斎へ直行し、職場では終えきれなかった仕事にとりかかったのである。謝罪の言葉もねぎらいの言葉もなかったのだ！　こっちが呆気に取られる程だ。彼はたぶん今日がどういう日であるか、すっかり忘れてしまっているに違いなかった。貴文とはそういう男なのである。
　（まったく――）
　夏代はサイフォンから、友人の陶芸家が焼いてくれたマグカップに珈琲を移し入れた。
　（どうしたってこれは一言、突っ込んでやらなくちゃ）
　夏代が貴文に意見を言うのはそれほど多いことではない。貴文が亭主関白なのではなく、夏代が優しく賢いからだ。夫の信念信条のよき理解者であり、大げさに言えば、同志でもある。できるだけ彼の自由にさせてやりたいし、それが可能な環境を守っていかなければと思っている。でも、今夜ばかりは妻としての役目より母としての勤めを優先しなければならないだろう。
　珈琲をなみなみと注いだカップの把手に透明感のある指をからませて、夏代は立ち上がった。書斎の貴文に珈

琲を持っていくのは上川家の日課である。
「ママ？」
明日香がこちらを振り向いた。
「なに、明日香？」
明日香はつぶらな瞳をパチクリさせながら言った。
「あとでお風呂、一緒に入ろうね！」
夏代はにっこり微笑んでうなずいた。
「いいよ。カエルさんごっこしようね」
明日香も母親の明るい笑顔に満足してテレビの方に向き直った。
夏代は書斎の扉をノックした。
「あなた、入るわよ――」
夫の返事も聞かずに扉を開ける。三畳程度の、書斎と名乗るのも恥ずかしい狭隘な空間――。重厚な本と資料のコピーがすきまなく積み重ねられている。貴文は仕事机の上に覆いかぶさるようにして、一心不乱にワープロを叩いていた。
夏代は依然としてこちらを振り向かないままでいる夫へ咳払いをした。
「あなた、入ったわよ」
ようやく貴文は顔を上げた。
「おっ、お夏、珈琲か。そこへ置いといてくれ――」
夫が自分のことを若い頃の愛称で呼ぶのはそう悪い気はしない。貴文とは学生時代、同じサークルにいて知り

合ったのだ。卒業してもう何年にもなるのだが、二人はまだ学生気分をどこかに残していた。夏代は再びワープロに視線を戻した貴文に舌打ちしながら、コピーが溢れ返っている本棚の中段に、どうにかすきまを作ってカップを置いた。

「おい、気を付けてくれよ。大事な資料なんだから」

「わかってるって」

夏代は泥水の道を歩くように、書類の山をまたぎながら貴文に接近した。それに気づいた貴文は慌てて傍らの資料を伏せ、ワープロの画面を両手で覆った。

「おい、なんだよ。どういう気だ？」

貴文の視線には妻の真意を計りかねている色がある。しかし夏代にしても、こうでもしなければ貴文が仕事を中断しないと知っている故の強行手段である。

「いつも言ってあるだろう。家族であろうがなんであろうが、公判途中の文書は見せるわけにはいかないんだよ」

このＲ市にある簡易裁判所の裁判官――。これが夏代の夫の職業である。彼の多忙さも、頑固なまでの厳格さも、すべてはこの職業に起因している。二人が出会った当時、すでに彼はこの職業を目指して勉強しており、夏代はすべてを納得付くで、というより、そんな彼の、理想を追う、清廉な姿にこそ惚れて結婚したのである。だからある程度の夫婦関係、親子関係の希薄さは黙認して

きたわけだ。
　「私が見たって理解できないでしょ」
　夏代は少し意地悪い口調で言ってやった。
　「お夏、そういう問題じゃないんだよ、これはね」
　「本当に見られて困るものだったら、職場で片付けてくるはずだわ。たいしたものじゃないから、自宅でもできるのじゃなくて？」
　「それはもちろんそうだよ。真に重要な書類は持ち出し禁止だよ。ここにあるのは二次資料さ。だけど、いったん気持ちが緩むと、どんどんルーズになって、いつか取り返しのつかないことに――」
　貴文はそこで言葉を切った。夏代ほど賢い女が裁判官の妻のイロハを失念するはずもないのだ。きっと何か、大事な用件でもあるのではないか。貴文は夏代の顔を見つめる。学生の頃と変わらない色白の肌……肩まで伸ばしている黒髪、前髪はひたいに斜めにかかっている……毛先の届いている切れ長の瞳は自分を責めているようだった。
　「……えーと……なんだっけ？……」
　夏代は呆れたとばかり両手を広げる。
　「本気で忘れちゃったのかな？　今日は明日香の卒園式でしょう」
　貴文はあっと声を上げて頭を抱えた。口を開けたまま、妻の顔を呆然と凝視した。

「し、しまった！　つい――」
「つい、って、あのね――」
妻の小言は三十分以上、続けられた。
「――と、思うんだけど、違うかしら？」
説教の最後の言葉に貴文は従順にうなずくしかない。
「悪かったよ。まったく」
「謝るのは私ではなくて明日香でしょう」
「そうだね、そうそう」
貴文は立ち上がり――が、どうしたことか、そのままま た椅子に座る。何かを思いついたらしく、座り直すとワープロの画面を睨み付ける。
「……あなた……」
「悪い。ここだけやらせてくれ。一段落がついたら、すぐに行くから」
夏代は何かを言い掛けたが、激しく打たれ始めたキーの音に沈黙するしかなかった。こうなってはもう取り付くしまがない。
「わかったわ。どうせ、いま、顔を出しても明日香はそっぽを向いちゃうでしょう。お風呂に一緒に入って機嫌をとっておくから、あなたはそのあと、ちゃんと会って謝って頂戴、きっとよ」
それだけ言うと、夏代は書斎を出た。
（仕方がないんだ。彼が悪いのじゃないもの）
夏代は自分に言い聞かせる。貴文のこの態度には理由

があるのだ。そうでなければ、いくら裁判官といえども過剰すぎる。夏代もじゅうぶんに悟っていた。以前の、平均以上ではあったけれども許容の範囲内であった勤勉さから、最近の、やや逸脱した仕事中毒へと夫の『病状』を悪化させた原因は、たしかにあの事件だったのだ。

――半年前、上川貴文判事は当市の職場に赴任したのだが、それは明らかな降格人事であり、左遷であった。貴文の前任は地方裁判所裁判官である。日本の司法制度を概略化すれば、最高裁を頂点とする綺麗なピラミッド型になる。東京にたったひとつある最高裁の下に、各ブロックの大都市におかれた高等裁判所があり、その下に地方裁判所や支部があって、これは都道府県の中核都市に所在する。大学在学中に司法試験をパスし、司法修習生としても優秀な成績を残して裁判官に任官された、貴文のような期待の若手は中規模の地方裁判所へまず赴任する場合が多い。事実、彼は新人とは思えぬ働きぶりを示し、将来を嘱望される存在であったのだ。ピラミッドの階段を確実に昇っていける器であると、誰もが認めるところであった。

問題の事件は一年前に起こった。

巨大製薬会社「タイリク製薬」会長、斉藤怜造の孫、将志による麻薬所持事件である。我が国の製薬業界最大大手、タイリク製薬は、戦前から存在していたものの、

数多ある薬問屋のひとつにすぎなかったのだが、太平洋戦争中に軍部と結託して急速に台頭、満州などへ進出、巨大な富を築いたことで知られていた。タイリク製薬と権力とのつながりは戦後も一貫して継続されており、一民間企業とは思えない影響力を政・財・官に持っている。日本を代表するような大企業の、超大物会長の親族が逮捕されたのだ。しかも薬会社の御曹子がクスリの犯罪を犯したのである。これが大騒ぎにならないはずがない。逮捕後、一週間ほどは新聞でもテレビでも取り上げられ、当時、２１歳だった斉藤将志の顔写真も至る所に露出していた。が、それを過ぎたころから、事件自体がなかったかのようにマスコミの俎上にのぼらなくなった。斉藤会長が手を回し、もみ消しを計ったのだ。それに大きく関与したのが、あの、内務庁・利敵思想研究対策部、通称、『思想部』であった。

　思想部は６０年代前半に創設された部署であるが、思想犯の過激な事件が勃発するたびに組織が強化されていき、現在では独立した司法機関として治安部門を担当する権限を獲得していた。思想部とタイリク製薬の癒着は最近、とみに深くなっている。言うまでもなく、厚いベールに包まれてはいるものの、思想部の仕事がタイリク製薬のような大企業の役に立たないはずがない。今回のような工作も思想部ならお手のものであったに違いない。四方八方に衝立が立てられていき、事件は国民の前

から隠蔽されたのだ。
　とはいうものの、逮捕が現実にあった以上、しかも現行犯逮捕であったわけだし、立件され、裁判にふされる法律のプロセスまでは、いくら思想部やタイリク製薬であっても覆すことは出来ない。斉藤将志は起訴され、上川貴文が裁判長を務める法廷へと送られたのである。
　もちろん、斉藤家は将志の無罪判決獲得に躍起になった。金にいとめを付けない大弁護団が結成され、検察側にも懐柔策がこうじられた。買収の金額は青天井と言ってよかった。それが思わしくないと見るや、脅迫行為もちらつかせた。これもまた思想部が指揮をとっていたわけだが、今や、思想部は検察をも凌ぐ実力を持っているのである。裁判官へのアプローチも露骨であった。担当裁判官は貴文を含めて三人いたが、他の二人は激しい工作に動揺を隠せないでいた。民間企業でいえば人事部に当たる法務省内の部署が、思想部に歩み寄ったと噂が流れたからだ。だれしも、金持ちの馬鹿息子のつまらない事件のために自分の将来を台なしにされたくはない。ピラミッドの下へは行きたくないのである。
　ただ一人、貴文だけがすべてを毅然としてはねつけた。同僚を叱咤激励し、弁護団が繰り出す引き伸ばし戦術をつぎつぎにさばきながら、公判を進行させていった。裁判も終盤になると、将志側は温情に訴える作戦に切り替えてきた。有罪であっても、執行猶予付きの判決

であれば刑務所に収監されずにすむ。それほど、貴文は攻略不能な牙城と認知されてきたのである。しかし、貴文の斉藤将志に対する心証は最悪だった。法廷の中での将志の態度はとても罪を反省している人間のそれではなかったのだ。甘やかされて育ったらしく、自分の思い通りに社会が動くと過信しており、他人への侮蔑的な言動は、貴文に何度も注意を受けるくらいである。一度などは、裁判官へ脅迫めいた言葉まで口にするのである。

『判事さんにだって大事な家族がいるんでしょう？　失いたくない家族がさあ。無実の罪で捕まったら、やっぱりどんな手をつかってでも釈放させようとするんじゃないの？　裁判官の家族に直談判してでもさあ』

驚いた弁護団が慌てて取り消させたが、これはまぎれもない脅迫ではないか。たしかに、その時期、上川家には不審な無言電話がかかってくるようになっていたのだ。あるいは、差出人不明の脅迫状も郵便受けに投げ込まれていた。そこには新聞の活字の切り抜き文字でこう書かれていたりする。

『女房のでかい尻を洗っておけ。俺の手のひらの形が染み込むようにな！』

だが、それを見つけた夏代はちっとも怖がらず、かえってケラケラと笑い、貴文の前で破り捨ててしまった。夏代は通常、貴文の仕事には意見を言わなかったが、この裁判だけは例外で、目に余る思想部や大企業の傍若無

人ぶりに幾度も言及するのだった。彼女の正義感は自分たちが脅迫の標的にされた事実によって、むしろ沸き立ち、ファイトを燃やしたのだ。あんまり頭に血を昇らせるなよな、貴文は苦笑しながら夏代の肩を叩いたりしたものだった。

　さて、判決の前に検察の求刑があり、それはまったく腰砕けの内容であった。将志に科せられるべき懲役はたったの三カ月、拘留期間を引けば、ほとんど刑務所に入らない計算となり、成人による麻薬の不法所持では異例の軽さである。しかも、被告はじゅうぶん反省しており、更生の可能性大いにあり、情状酌量の温情判決を期待するとの付帯意見まで表明されたのだ。これでは求刑なのか最終弁論なのか、わからない。判決が求刑より重い罪を被告に科すことはまずなく、それより軽くなる例がほとんどであるから、この時点で、将志側が実質的な勝利を勝ち取ったと、誰もが思ったのである。

　いよいよ判決の日、意気揚々とはしゃぎまくり、係官の制止など、どこ吹く風の被告人席の将志に対し、上川裁判長はなんと求刑を上回る懲役六カ月の判決を下したのだった。これは違法な判決ではなかったが、異例中の異例と言えるものであった。判決文で裁判長は将志がまったく反省しておらず、情状を酌量する余地はなく、実刑が相当であると、検察側の求刑をも厳しく批判した。さらに彼の人格の未熟さについて大きく触れ、斉藤家の

家庭環境のイビツさにまで踏み込み、責任はそこにこそ存在すると断罪するのだった。よって、それが改善され、正されないかぎり、被告が再び犯罪に手を染める危険性を指摘して、もし被告が仮出獄した場合、保護観察を一年間つけるとの処分も追加されているのである。見方を変えれば、この部分は斉藤怜造の画策に対する反撃と思えなくもない。貴文の信念が色濃く滲み出た判決であった。

　保釈を取り消され、再び収監されると知った将志の怒りは凄まじいものだった。貴文を指差して、罵声を浴びせ、必ず復讐してやると喚き立てた。表情は異常者のそれに近かった。閉廷を宣言する貴文の冷静さとは好対称をなすのだった。

　しかしこれで終りではなかった。いや、始まりと言ってよかったのだ。面目を潰された形の思想部は組織を上げて、貴文を抹殺にかかったのである。まず、司法当局首脳に圧力をかける。どういうルートを使ったのかは定かでないが、ある程度、成功した。貴文は次の人事異動で、あろうことか、簡易裁判所の判事を命ぜられたのである。簡易裁判所とは先ほどのピラミッドでいけば、最下級の地位にある裁判所なのだ。扱う事件も小さいもので、数十万円以下の民事訴訟がほとんど、刑事事件を扱う場合もないではないが、ようするにコソ泥のたぐいが相手となる。貴文のような気鋭の裁判官がつく職場では

到底なかった。
　夏代が最も感情を揺さぶられるのは、ここである。夫の才能と心情を一番理解している彼女は、万が一、貴文がこのまま埋もれていってしまうと考えるだけで恐怖すら覚えるのだった。そんなはずはない、それは神様が許さない、と何度も思い直してはみるものの、閑職に追いやられてもヤケにならず、小さな小さな訴訟であっても全力投球を怠らず、いや、地裁時代をも上回るような精力で、仕事に集中している彼の努力が認められ、必ず報われるという保証は夏代にはないのだ。現実の官僚システムの壁が厳然としてそびえたっている。旧来的な悪弊とともに、最近では思想部のような連中もはびこっているのだから。
　司法当局首脳としては、貴文をその身分に降格させることで、思想部の怒りに応えようとした。彼らとの軋轢が長引けば今後の公判維持にも支障が出かねない。司法権の独立や自分たちのメンツも考えれば、それがギリギリの妥協の線だった。思想部は表向きにはこの処置を受け入れたが、それで矛先を収めたわけではなかった。
　裏では……。

監視サイト内ログ

****200131　　目標ｙ、入浴準備。撮影開始。感度良好。

「さーて、今夜も、おかあちゃんのデカイお尻とご対面だぜ」
「俺はどっちかというと、オッパイのファンなんだがね」
「たしかにな。赤ん坊にきつく吸われた乳首はツンツン突き出てるし、全体の格好も悪くない。どうかすると、まだ母乳が垂れてくるかもしれん。でもやっぱり、ケツだろ、この女は。見事と言うしかない張り具合だもんなあ。それにあの谷間の底にムンムンしているドラ焼きとのバランスがたまらんて」
「ドラ焼き？　うまい事言うね、踏み付けると何かハミ出してきそうだもんな」
「叩けばいい音で鳴りそうじゃないの。何度見ても生唾ものだぜ」
「そうっすか？　僕はそろそろ飽きてきましたけどね」
「お前はロリコン趣味だもんな」
「娘の方がいいんだろ？　（笑い）」
「やだなあ、そんなことありませんよ。――だけど、もう半年じゃないですか。いつになったらシッポを掴めるんでしょうね？」

「おい、習わなかったのか？　こういう作業は一も二もなく、根気だよ」
「でもこの家族は政治犯じゃないでしょう。動きも少ないし、成果に拡がりがないっすよ」
「お前の言わんとするところにも一理ある。このトリプルＡ、２４時間態勢の監視は、普通、国家に対する反逆者へのシフトだからな。しかしこいつらも重要なんだ。どんな小さな火でも完全鎮火しておかないと、今後もこうした、思想部に刃向かう手合いが現れないとも限らない。我々がどれほど恐ろしいか、社会に見せ付けておく必要がある」
「思想部の最大のパトロンであるタイリク製薬への仁義もあるわけだよ。思想部出身のＯＢが選挙に出るときには多額の資金があちらさんから供給されているんだから」
「裁判官生命を絶つのが至上命令だってことはわかります。でも全然、材料がないでしょう。仕事一途で、家庭と職場の往復以外、ほとんど私生活に逸脱がありませんからねえ、おとうちゃんは。しかもこの不屈の闘志ときたらどうです。普通なら、致命的なスキャンダルでも提供してくれそうな待遇に追いやられたはずなのに、まったくその兆しがない。ゴミのような訴訟に、なんであんなに勤勉になれるのか……」
「それがここのおとうちゃんのキナ臭いところだぜ。

左遷された怒りを前向きなエネルギーに換えて、何時の日かの復活を信じている。まだ火は消えていないんだよ」
　「だからこそ、最近は徐々にターゲットをおかあちゃんへと絞り込んでいるんじゃねえか。この女房の評価は最初、芳しいものではなかったよな。近所と不仲になるわけでもねえ、不倫するわけでもねえ、交通事故を起こすわけでもねえ、生理がきついからって万引きを働くわけでもねえ、これまた付け入る隙のない良妻賢母ぶりなんだからよ。だがよ、おとうちゃんに比べればまだマシな部分もある。なにしろ美人であるし、母親としての責任感も強い。そういった女としての強さ弱さをだ、うまくこう、プロデユースしてさ、俺たち好みのトラブル・ウーマンに仕立てあげられねえかと、そういう段階なんだよ、今はよ」
　「そうっすけど……」
　「聞いてないか？　走査Ｂ班の報告によれば、おかあちゃんの身辺に、針の穴ほどの小ささではあるが、なんとか発展させられそうな『ヒビ』が、生じつつあるんだと。ポツポツと、揃い始めてんだよ、このベッピンおかあちゃん陥落のアイテムがよ」
　「え？　なんです、それって？」
　「おい、入ってきたぞ。畜生、タオルが邪魔で『毛』が見えねえ！」

以下省略

　夏代は髪の毛をうしろでまとめ、親指と人さし指にひっかけた輪ゴムを広げると、一本になった柔らかな髪をそれへ通した。
　「明日香、早く脱ぎなさいよ」
　明日香は上半身は裸になったものの、まだスカートを脱いでいない。じっと、母親を観察しているのである。彼女の自慢の母親は髪をピンで留めてセットするとブラジャーも取った。自分が五年ほど前まで吸い付いていたオッパイが二つ、並んでいる。子供の目にはとても大きくて頼もしく見える。ちょっと身体を傾けるだけで、それはむちむちと揺れうごく。茶色のカラメルをのせたプリンのようだ。自分には存在しない肉の器官に、明日香はまだ羨望も劣等感も覚えない。ただ、楽しく、幸せな気分になるだけだ。ちょうどデパート屋上にいる、縫いぐるみショーのうさぎのキャラクターを見つめる目と一緒だった。母親はジーンズを脱ぎ、パンティを脱いで全裸になった。
　「あっ、ここにもホクロがあるよ」
　明日香の小さな指が夏代の太股の内側を指した。
　「え？」

夏代は背をかがめて足を開き加減にすると、その部分をチェックする。
「ここにもあったねえ」
風呂に入るたびに、娘は母親のホクロを見つけては喜んだりする。一種の遊びなのだが、子供の好奇心は大人の意表をついてくるので面白い。
「さ、明日香のも見つけてあげるから裸になって」
明日香は、ハーイと返事をしてスカートもパンツも脱ぐと、洗い場へ飛び込んでいった。夏代もタオルで前を隠しながらそれに続いた。浴場はかなりコンパクトである。子供と二人であっても洗い場は窮屈な感じが否めなかった。地方都市に作られた、簡裁判事用の官舎など、一軒家であってもこれが精一杯なのだろう。
シャワーで一通り身体を温めたあと、夏代はプラスチックの低い椅子にヒップを乗せ、自分の膝の上に明日香を横抱きにした。
「明日香もあと一カ月で小学生なんだから、そろそろ自分で頭を洗えるようにならないとねえ――」
明日香はバツが悪そうに笑うだけ。とうぶん、この居心地のいい特等席を手放す気持ちはないらしい。夏代も指で娘の頬をつつくだけで、娘の甘えを容認しているようだ。こうした肌と肌の本当のスキンシップは親子の絆を深めるためにも大切なのである。夏代はそういう教育方針でやっている。シャンプーを両手一杯に泡立てて、

娘の歓声を誘ってから、その頭にのっけていく。去年の春先までなら、ただこれだけで、嫌がって泣くこともあった明日香だが、今は目を固くつぶり、歯を食い縛って辛抱することを覚えている。自分の太股に娘の緊張が伝わってくる。微笑ましい姿のなかに、たしかな成長も感じ取って、夏代は感動のあまり、ふと涙ぐみそうになった。私のお腹から出てきたときは、あんなにちっちゃかったのに！　愛しい愛しい娘、明日香……。何百回もキスしてやりたい衝動にかられる。永遠に一緒にいてやりたい。ニュースなどで、子供を事故や事件で失った母親が映し出されるたびに、夏代はとても正視できずに、顔を背けてしまう。闇のような深い悲しみにうちのめされた表情のない表情。そういった母親たちと自分を置き換えてみるだけで、全身に鳥肌が立つ。明日香を失うなど考えられない。そういう目にもし会えば、自分はとても正気ではいられないだろうと夏代は思うのだ。泡の帽子を乗せた天使。生意気を言うようになった天使。ママが好きで好きでしょうがない天使。――

　シャワーを小出しにして、ゆっくりと、顔へかからないように、泡を流していく。指の間を通る髪の毛の幼さに夏代はまた微笑んだ。

　「さ、今度はママの番よ。明日香は浴槽に入って――」

　湯ぶねにつかった明日香は黄色いアヒルやカエルの玩

具を浮かべたり沈めたりして、母親の清浄が終えるのを待つことになる。夏代はボディシャンプーをタオルに泡立ててから、簡単に身体を洗っていく。子供が生まれる前なら何十分もかけて丹念に清めたのだが、母親になってからはそんな習慣も遠い過去である。もちろん、股間や腋の下や首の回りなどは手を抜けないが、全身の肌を磨いている暇はなかった。髪は明日にでもまた時間を見つけて洗おう。

「あっ、背中にもホクロがあった！」

「どこどこ？　ママは見えないから明日香が指でつついてみてよ」

「うん、いいよ」

明日香は浴槽から身体を乗り出して手を伸ばし、母親のくびれた胴部の、背骨の最後のところにタッチするのだった。夏代はくすぐったいと言って笑い、その笑い声に触発されて、明日香もにぎやかに笑った。夏代も浴槽に入った。大きく片足を上げて、バスのシンクをまたぐ。薄桃色に火照った母親の裸体。いつもと違う感じがして、明日香は嬉しかった。とても綺麗に見えるのだ。化粧をいっぱいした後も綺麗だけど、桃色のキリン（絵本の中にそういうキャラクターが登場する）みたいになったお風呂のママの顔もとても綺麗である。太股のあいだの黒い短い髪の毛（明日香は母親の陰毛をそう呼んでいた）から滴がいくつも落ちた。母親の大きくて豊かな

身体が狭い湯舟に収まると、お湯がどっと外へ溢れ出る。明日香にはまたそれが楽しかった。
　「明日香ちゃんは小学校に入ったら、何が一番、したいですか？」
　夏代の首につかまり、太股の上に膝立ちする態勢になった明日香に、夏代は訊ねた。
　「お勉強かな？　お友達と遊ぶことかな？」
　明日香はしばし考えた。ママの頬に汗の玉がついている。膝があたるオッパイは湯の表面に半分だけ浮かんでいる感じ。
　「あのね――」と明日香。ママの軟らかそうな耳に口を寄せてささやいた。「給食が楽しみ」
　夏代はズッコケながら華やかに笑う。小学校の入学式は、もうあと一カ月後に迫っている。
　「ママ、あれやって」
　明日香は可憐な握力で夏代の二の腕の肉をつかむ。
　「なーに？」
　「カエルさん」
　夏代は首をすくめ、自分の鼻の頭と明日香の鼻の頭とでキスしながら、
　「では、いっちょ、やったるかー」
　明日香を背中へ移動させて、自分は浴槽の中でうつ伏せに身体を沈める。明日香は母親の背に馬乗りになる格好だ。もちろん手足を伸ばすことはままならない。足な

どは、それこそ、カエルのようにMの字になって脇腹へくっついている。窮屈な浴槽いっぱいに、夏代の豊満な肉体が拡がった。夏代はまず臀部を浮上させた。丸みを帯びた肉の小山が滴を弾き、ぶりぶりと左右に振れる。
「カエルのお尻はこんなかなあ？」
数え唄のように夏代は口ずさんだ。
「違うよ違う、それはママのお尻――」
と、明日香がアンサー部分を唄うのだ。幼稚園で習うお唄遊びを下敷きにして、二人で作ったオリジナルである。入浴の最後にこれを決めるのが恒例であった。唄いながら、明日香は母親のお尻をピチャピチャ叩いた。
夏代は顔を湯からあげる。
「カエルのお顔はこんなかなあ？」
「違うよ違う、それは美人のお顔――」
明日香は背後から夏代の首にしがみつき、頬をあわせた。そうしていないと次のアクションでは大変なことになる。
「では、いきますよ、つかまっててくださいよー」
夏代は浴槽の中で大きく泳ぎだした。といっても、身体を上下させるだけで、メリーゴーランドの馬のような単純な動きである。
「カエルの泳ぎはこんなかなあ？」
それでも大量の湯がざぶざぶと跳ね上がり、背中の明日香にもしぶきがかかった。明日香はそれが楽しくて楽

しくてしょうがない。お腹の底からの歓声をあげて、そして唄うのだ。
「――違うよ違う、これは子カバのダンス――」
「ゲロゲーロ、ゲロゲーロ、カバガエルが唄うよー」
バスルームはいつまでも母娘の賑やかな笑い声で満ち溢れた。

監視ログ

****204215　目標ｙ、目標ｚ、入浴終了。

監視サイト内ログ

「いいなー。僕もあんな母親が欲しかったスよー」
「俺だって、あんな女房が欲しかったぜ」
「完璧じゃないっスか？　非のうちどころがないって感じ」
「あんな母親に育てられていたら、こんな変態人間にはなっていなかっただろうにってか？」
「僕の母親は体罰主義者でしてね。でもやっぱ、母親は優しくなくちゃ、意味ないっスよねー」
「うんうん、頑張ってることは認めてやるよ、あのお

かあちゃん。セックスご無沙汰歴、もう二カ月だもんな」
　「本当は、布団の中でカエル脚をやりたいんだろうによ」
　「豚に真珠っスよね。おとうちゃんがあれでは」
　「たまには息抜きにオナニーでもすりゃ、いいんだが。腋毛を処理する暇もなく働いてる。いずれストレスで頭がおかしくなるぜ」
　「優しくて頭がよくて子供思いで亭主思い、貞淑でユーモアがあって純真なところも残している。おまけに顔がよくて身体がよくて――か。ま、理想的な収容所のアイドルになるだろうよ（笑い）」

以下省略

　数日後、夏代は明日香を近所の友人のところへ遊びに行かせた。幼稚園で知り合った母親で、彼女の息子が明日香と同じクラス、子供同士も仲がよかった。互いの母親が２、３時間、自由な自分の時間を確保するためにちょくちょく預け合うのである。もっとも彼女と違い、夏代はその自由時間でショッピングをしたりスポーツクラブへ通ったりするわけではない。
　近所の衣料量販店のワゴンセールで買ったブルーの半

袖Ｔシャツを頭からかぶり、洗いざらしのジーンズに、一児の母の太股と臀部をギュウギュウ押し込むと、夏代は自転車に飛び乗った。サドルを内腿で挟むようにして、ペダルを強く踏んで加速する。自宅のある住宅地から表通りに出ると、歩道も少し広くなり、夏代はスピードを上げた。春の空気がすっぴんの顔を押しつけてくる。前髪が立ち上がり、後退してなびく、ポニーテールにした瑞々しい黒髪――。

（半袖はまだ寒かったかな）

夏代はやや後悔したが、しかしそれも適度な緊張感につながっていくようで心地好かった。商店街の貼り付いた表通りから横道へそれ、つきあたりの児童公園を横切って、アパートが並んだ地区へとハンドルを切った。低層のアパートがかなりの面積に、秩序を無視して建てられたために、夏代の自転車は何度もカーブを曲がり、上りと下りのきつい坂を越えなければならなかった。額や胸元あたりにうっすらとひと汗掻いた頃、ようやく目的のアパートの前に到着する。慣れているらしく、彼女は猫の額ほどの駐車スペースの片隅に躊躇なく自転車を留めた。買い物篭からポシェットをとって、そのアパートの一階の右端の部屋のベルを押した。インターホンからは女の声がしてきた。

「ハイ、どなた様？」

「お早うございます。上川です――」

　言い終わらぬうちに鍵のはずされる音がして扉が開いた。中年の女性の柔和な笑顔が夏代を迎え入れた。二人は挨拶もそこそこに部屋の奥へと入っていく。１ＤＫのこじんまりとした間取り。中央の部屋に大きなベッドが置かれている。通りが見える窓に向かってリクライニングを持ち上げ、背をもたれている青年――パジャマは着ておらず、上下のジャージを身に付けていた――が青白い顔をこちらに曲げて微笑んだ。
　「山本さん、お早うございます」
　夏代は手を上げて挨拶した。山本と呼ばれた青年はこっくりと頷いた。いつもの明るい声を出して挨拶を返さなかったところを見ると、彼は少々気分を害しているのかもしれない。ごく稀だがそういう時もある。とくに前の担当者がこの中年の女性の場合には……。
　夏代が山本達巳のヘルパー・チームに参加したのはこちらの町へ引っ越してきて、まもなくである。達巳は下半身不随で両手にも軽度の麻痺がある身体障害者だ。しかし難病を患っているのにもかかわらず、自立心が旺盛で、高校卒業後、独り暮らしを強く希望した。両親は難色を示したらしいが、達巳の思いは頑強で、とうとう実行に移してしまったのだ。それでも、２４時間態勢でのヘルパーは必要で、あるボランティア団体に協力を要請した。その団体の幹部が、夏代の学生時代の同級生と知り合いだった関係から、チームに参加することになった

のである。彼女は学生時代からそうした活動をしており、就職してからも続けていた。出産と育児、それに貴文の異勤のため、仕事はとりあえず諦めるしかなかったが、ボランティアはやめるつもりはなかった。だから誘いがあったとき、家が近いこともあって、すぐに承諾した。家庭に収まっているだけの生活では満足できず、常に社会にかかわっていたい――、夏代の人生哲学である。貴文は、明日香もいるのにと心配したが、妻の頑固は如何ともしがたい性質である。

達巳とはすぐに打ち解けられた。お互い明るい性格なので、昔からの友人のように自然に付き合えている。ヘルパーは１０人前後いて、ローテーションを組み、自分の空いている時間を利用してここへ赴くわけだ。夏代が受け持っているのは週二日の各二時間である。夜は学生中心、日中は夏代のような主婦が多い。都会でのボランティア経験が豊富な夏代に言わせると、やはり層が薄いという地方の限界もある。達巳のような場合、数を揃えないといけないので、無理をしてかり集めるから、どうしても質に難点が出てきてしまうのだ。この中年女性の場合などがそのいい例である。

「どうでした？」

夏代は彼女にそっと訊ねた。

「ええ、いい子にしてましたよ」

これが彼女の返事だった。夏代は、内心、やれやれと

困惑してしまう。悪気があるわけではないのだが、これでは達巳を子供扱いである。いや、幼児の扱いと言ってもいい。彼はすでに成人した立派な青年なのだ。心のどこかに障害者を半人前の存在と見下しているふしが感じられる。ボランティアが慎まなければならない悪い態度のひとつなのだ。繊細な達巳が不快になるのは当然である。

「いえ、そうではなく、身体の調子は――」

夏代は聞き返してようやく知りたい情報を確認した。引き継ぎを終えると中年女性はニコニコしながら帰っていった。

「悪い人ではないんだけどねえ」

達巳は夏代を信頼しきっているので、そういう秘密めいた話題も口にする。

「嫌だったら、やめてもらうように、直訴してもいいんだけど」

達巳は笑った。「上川さんは東京の人だからなあ。そういう面にはシビアなんだろうけど、この町で、あんまり我を張るとね。そして皆、いなくなった、なんてことにもなりかねないし。贅沢ばかりは言ってられない」

「贅沢なんてことはないけど」

しかしたしかに達巳の言うとおりかもしれない。彼の自立そのものですら、非難めいた中傷を言う人間の多い土地柄である。障害者は家か施設にいればいいのだ、と

いう無理解な論調――。彼らはただ独り暮らしをすればいいのではなく、そういったものとも、闘っていかなければならないのだ。夏代は僅かでも自分の力がその闘いの助けになればと願いつつここに通っているといってもよかった。
「まあ、悪い人ではないんだから」
達巳は繰り返して自分を納得させているようだった。
夏代はまず風呂場とトイレの掃除にとりかかった。腕まくり、脚まくりして、雑巾やタワシを這わせる。
「上川さんには一番、疲れる力仕事をまかせちゃって……」
いつものように恐縮する達巳。ベッドからトイレへ声をかけてくる。
「母は強し、よ。母親になってから、腕も脚もひと回り太くなったかなあ。こんなのは朝飯前ってところだね」
「それはね。上川さんが旦那さんを信頼しきっているってことだよ」
「え？　なにそれ？」
「つまり身体が『女型』から『母型』へ移行したんだな。異性を愛しているときはほっそりとした身体の方が得だけど、子供を育てるのには少し頑丈なほうがいいわけでしょ」
夏代は雑巾を絞りながら笑った。

「へへへ、旦那が聞いたら、ぶっ飛ぶわね。もう彼には愛情が向けられないってことじゃない」
「いや、だから、二人の愛情は安定期に入っていて、特別な方策を用いる必要がなくなったのさ。互いに信頼しきっているんだよ。成熟した夫婦関係。ごちそうさま、ってところだね」
近頃、達巳の口にする話題はこういった男女の愛情問題に関係する事柄が多くなった、と夏代は薄々感じていた。若いのだから当然であるし、悪い傾向とはいえないが、一抹の寂しさもなくはない。いずれあなただって結婚して……などと、軽率に口に出来ない現実が達巳にはあるのだから。ヘルパー仲間にそれとなく聞いてみると、達巳がこれほど明るく、聞きようによっては際どく感じられる内容を話題にするのは、夏代が担当する時間だけらしい。達巳は自分を好いている、との自覚を意識しなければならないのだろうか。でも夏代は楽観している。達巳は頭もいいし、人妻で幼い子供もいる自分へ、無益な感情を募らせるような真似はしないだろう。彼とはウマがあうだけなのだと言い聞かせ、化粧をしないすっぴんの顔で来訪する程度の配慮をするくらいで、夏代は出来るだけ自然にふるまおうと思っている。
掃除を終えると新聞の黙読の介助。上肢障害者にとっては新聞を開いて、目の前でそれを固定して、数分間、継続する作業はかなりの負担なのだった。

「きっとロボット工学だってまだクリアできていない行程じゃないかな」
　達巳はなかなか博学で、驚かされることがしばしばだ。新聞も政治面からスポーツ欄、株式の細かな数字まで読みたがる好奇心を持っていた。夏代はすべてのページを開き、ベッドテーブルの上に傾斜を付けて置くのである。国際情勢や三面記事の事件についての感想を述べ合う。彼の洞察力は鋭く、アイロニーに溢れているので、頷いたり笑ったりするばかりである。もっとも、ヘルパーは被介護者へ政治的宗教的プロパガンダやオルグをしてはいけない規則があるので、神経のいるところである。こちらの政治的信条は積極的に表明せず、曖昧な態度に終始せざるを得ない場合もあるのだ。
　今日の達巳はやはりどこか虫の居所が悪いらしい。新聞読みをやや腹立たしげに、中途で終了させた。
「いや、上川さんのせいじゃないよ」
　きょとんとしている夏代の表情を見て、達巳は言った。それでも笑顔はない。
「いずれヘルパーは友人とは違うわけだから。腹の底から語り合う、ぶつかり合う、なんてのは、本物の親友じゃないとありえないんだな」
「それは――」
　仕方がない、と夏代は言いかける。これはボランティアの永遠の課題と言っていい。どこまで被介護者のプラ

イバシーに関与すべきなのか。ヘルパーと友人とは種類の違うものだけど、達巳の限られた生活範囲で、生涯の友と言える人間に出会う可能性は、愛する異性に出会う可能性同様、かなり低いのである。彼の苛立ちはそうした絶望との葛藤が生じさせる一種の『微熱』なのだ。助けになれればいいがと真剣に思う。だが、その方法が、言葉が、見当たらない。

達巳が笑い声を上げた。

「上川さんのいいところは、その青っぽいところだな。僕の意地悪な言い草にも、怒ってたしなめたり、マニュアルに書いてあるような対応で丸め込もうとしたりしないで、困ったように言葉を失ってしまうってところ。人間のクオリティが他のヘルパーさんとは違っているんだろうね。尊敬していますよ。いや本当に――」

達巳はそう冷徹に分析することで、心の葛藤を鎮めようとしているのだろう。彼こそ尊敬すべき人間であるのかもしれない。

達巳は気分転換をかねて散歩に出たいと言った。

「本通りのスーパー、改装したんじゃなかったっけ？」

「ああ、そうそう。食品売り場がデリっぽくなったんだよ」

夏代は折り畳み式の車椅子を拡げ、形を整えた。ベッドから達巳を車椅子へ移動させるのが少々骨である。ベ

テランの夏代だから、女手ひとつでもなんとかやれるのだ。車椅子をベッドに平行に止め、まずベッドの端から足を投げだすようにして達巳を座らせる。肩を貸し、片手を足の下へ入れ、片手を達巳の脇から背へ回し、身体の方向を９０度、回転させる。
　「よっこらしょ――」

監視ログ

****113402　目標ｙ、固定監視点ａにおいてヘルパー業務。撮影開始。

監視サイト内ログ

　「あれじゃ、どうしたって、おにいちゃんもたまらんだろう。密着姿勢だもの」
　「僕だったら、あのまま押し倒してますよ。ムレムレのおかあちゃんの横顔が自分の胸に当たるんですからねえ。つかんでる肩の感触は、柔らかいんだろうなあ」
　「そりゃお前、男子学生のヘルパーの肩とはわけが違うだろうさ。華奢で丸くて、あったかくて――。髪が鼻をくすぐってるよ。罪だねえ、シャンプーの匂いなん

ざ、男が欲情するためにあるようなもんだ」
　「なにしろＴシャツ一枚だからね。伝わってくるものは色々あると思うよ」
　「あのおにいちゃん、あっちの方は正常なのかい？」
　「基本的には問題ないみたいです。定期的にマスターベーションもしてますし。ま、童貞でしょうけど」
　「で、この間、ようやくスキャン、できたんだと。いたしている最中に、おかあちゃんの名前を口走っているのを」
　「そいつはヒットだったな。それをうまく利用すれば……」
　「ご同情するよ。告白するわけにもいかんだろうし。素振りでも見せたら、最高のヘルパーを失うことになる。一種の地獄だな」
　「お、立ち上がった。おかあちゃんも頑張ってるよなあ。自分と同じくらいの身長だし、両足を踏ん張って腰を入れて――、ジーンズのお尻がはち切れそうだ」
　「バランスを崩したふりをして、胸を触っちまえばいいのに。不可抗力なんだから、文句は言わないでしょう」
　「下劣な人間とは違うんだよ、あのおにいちゃんは。慈しむような愛情なんだよ」
　「そんな純真なおにいちゃんを巻き込んで、目標にトラップを仕掛けようとしているのはどこのどういう連中

なんですかね、まったく」
　「仕方がねえ。これも回りまわって、お国のためさ」
　「目標、外へ出ます。尾行班、継続してください――」

　　以下省略。

　玄関に付けた簡易式スロープを慎重に下りていく。
　「少し肌寒いね」と達巳は言った。「上川さんが半袖だから油断していたよ」
　「私はほら、情熱の女だから、この程度はどうってことないのよ」
　膝掛けを達巳の足にかけてやりながら、夏代は軽口を叩く。呆れたように笑う達巳。本来の調子が戻ってきたようだ。車椅子を押して道に出る。それでも雲の合間からさしこんでくる陽光はしっかりとした春のものになっていた。
　公園の側を通る。子供たちがサッカーをして遊んでいる。
　「そういえば――」思いついたように達巳。「上川さんの娘さんは入学式、終わったの？」
　「まだよ。でももう一カ月はないわ」
　「早いね。こっちに来てから半年でしょ。最初の頃

は、幼稚園の話ばっかりだったもんなあ」
　「けっこう私も親バカだから。周りは閉口してるんじゃないかな」
　「いや、僕なんかは子供の話を聞くのが好きだから。娘さんの話をしてるときが、一番――」
　「え？」
　「別に。なんでもない。準備、大変なんでしょう？色々買い揃えたりしなけりゃならないから」
　夏代は達巳の背後で頷いた。
　「そうそう。そうなんだけど、まだちっとも準備できてないんだよねえ。両親そろってノンビリしてるから」
　「ボランティア、いつでも休んでもらってかまわないんですよ。忙しいんでしょう。上川さんは頑張りすぎなのかも」
　「ありがとうございます。必要が生じたらしっかり休暇をもらいますから」
　二人は本通りの商店街へ出て、スーパーマーケットに入っていく。のどかに過ぎていく時間。被介護者の笑顔。そして信頼を感じる会話。これでこそ、ボランティアをしている意味がある。とても充実した気分だ。生きる喜びとはこういうことを言うのじゃないかしら……。あとは夫さえ、望みの職場に復帰を果たしてくれたなら、何も文句はないのだけれど。
　車椅子は食料品の売り場へ向かう。

「今夜はシチューにしようかな？　野菜のいっぱい入ったやつ。もっとも肉は高くて買えないのだけどさ」
「じゃ、下ごしらえは私がやっとくね。あとは温めればいいだけにしておくから」
夏代は材料を達巳と相談しながら篭に放り込んでいく。そうしながら、今夜の我が家の夕食は、明日香の好きなハンバーグにしようか、貴文の好物のカレイの煮付けにしようか、頭を巡らせた。いっそ両方、サービスしちゃおうか。誰の誕生日でもないけれど、今日はそうせずにはおれない心境だった。せめて一日が終わるまでこの幸福感を途切れさせたくはない。たとえ明日、どんなことが待ち受けていようとも……。

第二章　避けられぬ亀裂

（野良猫のせいかしら？――）
上川家の住むつましい官舎には、猫の額ほどの庭があり、夏代はそこに花壇を作って草花を植えていた。ささやかなものだが、クロッカスが咲き、チューリップが咲き、夏には向日葵が咲いて、明日香を喜ばせるのだった。
夏代は午前中、久しぶりに雑草の手入れでもしようと思い、花壇の前に立ったのだが、その一隅に大きな穴が

開いているのを発見し、当惑した。ベイスターズの野球帽をかぶり、首に日除けのハンドタオルを巻き、軍手をはめた完全武装の夏代は目測で穴の直径を確認する。３０センチはあるだろうか？　そこは来春、また紫色の花をつけるであろう、クロッカスの球根が植わっているはずの場所だった。クロッカスはこの花壇ではシーズン最初に花を咲かせるので、明日香にも人気の花であった。擂り鉢状に掘られた穴の底には千切れた根は発見されても、球根はなくなっている。

（明日香の悪戯ではないだろうけど）

明日香は一時間ほど前から友達と公園へ遊びに行っている。明日香はこういう悪戯はしない子だし、今朝、余裕はなかったはずだ。これは夜間におこなわれた仕業である。たしかに野良猫の徘徊は町内でも周知の事実である。たぶんそのせいであろうけれど……。夏代はしゃがんだまま、シャベルでチューリップの茎をかき分けた。猫の足跡はみつからなかったが、さりとて人間の侵入した形跡もない。不吉な予感は残ったものの、夏代は猫犯人説で納得し、穴を埋め返した。明日香が見たら嘆き悲しむだろう。

その明日香が帰ってきた。

「ママー！」

とくに用事がなくても、庭にママの姿があれば飛び付いてくる。

「よっちゃんとはもうお別れしたの？」
よっちゃんは遊び仲間である。明日香は頷き、そして少し思案して、今度は首を横に振った。
「どうしたの？」
「よっちゃん、泣いたから帰ったの」
「ン？　また明日香が泣かしたか？」
幼稚園ではけっこう姉御肌の明日香である。
「違うよ！」
明日香は濡れ衣を着せられてふくれた。
「おにいちゃんがブランコをとったんだよ！」
「悪いおにいちゃんだねえ」
夏代は子供の間のたわいのない喧嘩であろうと、とくに気にもとめなかった。今は春休みでこの時間でも小学生が公園に来ていておかしくはない。夏代は明日香の頭を撫で、家に入って遊んでなさいといって、自分は雑草取りに集中しようとする。しかし明日香は母親の背中にまとわりついて離れず、邪魔をするばかり。
「ひっつき虫だなあ。もう小学生なんだからね」たしなめる夏代。
「ねえ、ママ、『きょにゅう』って、なーに？」
「え？　きょにゅう……？」
娘の口から飛び出した意外な言葉に、すぐには『巨乳』の漢字を思い起こせなかった。
「――きょうりゅう――じゃなくて？」娘を見る夏

代。
　明日香は首を振った。
　「いーや、きょにゅう！」
　他に似た発音の語彙はひらめかない。
　「巨乳がどうしたの？」
　「ママはきょにゅうなんでしょう？」
　「……」
　明日香もテレビを見るから、気を付けていても、そういった情報を完全に排除するのは無理である。どこかで言葉を覚えたのだろう。
　「おにいちゃんが言ってたよ。明日香のママはきょにゅうなんだって」
　夏代の頬がやや緊張する。もちろんマセた小学生なら口走ってもおかしくない。でも――。
　「おにいちゃんって誰？」
　「さっき公園にいたおにいちゃん」
　「よっちゃんを泣かしたおにいちゃん？」
　明日香は母親の真剣さを感じて、恐々と頷いた。
　「そのおにいちゃんって、背が高かった？」
　「……パパより高かったよ」
　夏代は思わず立ち上がった。不吉さが全身をこわばらせる。変質者か？　直感だが違うような気がする。考え過ぎではあるかもしれないが、もしこれが貴文の仕事関連の嫌がらせであったら悪質である。子供にアプローチ

するとは許しがたい。この町に来てからはその種の嫌がらせとは無縁だと思っていたのだが。
　「明日香、家に入っていなさい！　ママが来るまで鍵を開けては駄目よ！」
　夏代の剣幕に明日香は縮みあがり、玄関へ駆けこんだ。夏代はその足で公園へ向かった。
　住宅街の片隅にそれはある。簡単な遊具しかない小さな公園だが、ドングリを落とすミズナラの木が三本あるので、真夏などには涼しい木陰を提供してくれる、住民にはわりと好かれた場所だった。夏代は公園の名前を刻んだプレートのある、入り口のひとつから中へ足を踏みいれる。まだいるとは思えなかったが、心臓が高鳴った。カッとして駆け付けてみたものの、現場に到着すると、ずいぶん無謀かつ無思慮な行動のような気がしてくる。もしその男がいたとして、自分は一体どうすればいいのだろう？　危険な目に合う可能性もないではない。
　（民家も近いし、いざとなれば大声を出せば大丈夫よ）
　と、自分を落ち着かせ、様子を探る。
　子供たちの声はしない。誰もいないようだ。
　こちら半分にジャングルジムとシーソーがあり、遊歩道を通って、樹木の向こうにブランコがあった。夏代は背伸びをして木立の奥を確かめたが、早くも緑の葉が茂り始めており、死角になっている。

いや、待てよ――。
夏代は耳を澄した。
音が聴こえる。油の切れた、蝶番のきしむ音。
ブランコが、ゆっくりと前後に振れているのだ。
誰かいる！
夏代は首にかけていたハンドタオルで頬の汗をぬぐった。
このまま戻ることもできるのだが、娘の安全を思えば引き返せない。ジャングルジムの鉄柱を伝いながら、ミズナラの木の枝をくぐって、反対側へと顔を出した。
――男がいた。
明日香の言ったように背の高い、そして坊主頭の青年であった。白のワイシャツにギンガムのズボン。ブランコに腰掛け、両手で鎖をつかみ、風にまかせるように緩慢に揺れていた。二重瞼の目は大きく、前方を、ただぼんやりと見つめている。周囲の音などまったく耳に入っていない様子。何時間もその姿勢のまま過ごしているような雰囲気さえあった。
若々しい横顔は美男子と言えるかもしれない。鼻筋が通り、口元が整っている。ただ、肌の色が病的に青白い。病気療養を長期間していたのかもしれない。そして丸坊主の頭。どこか浮世離れしている。平日の昼間、こんなところで時間を潰している大人とは……。夏代は警戒して呼吸をとめる。青年は何の気配も感じていないよ

うであった。
　スニーカーで地面を踏み締め、思い切って接近する。
　「本当に――」青年が急に口を開いた。「いい気候になりましたね」
　ギクリとして立ち止った夏代の方を、青年は振り向いたのだ。視線が合った瞬間、夏代はこの青年の顔を自分が記憶している事実を悟った。横顔ではなく正面からの映像。誰だったか、すぐには思いだせない。
　「いい気候になりましたね」
　青年は繰り返した。そうか、と夏代は考えた。髪の毛がないからわからないのかもしれない。記憶にしまわれている肖像は頭髪付きなのではないか。夏代は心のなかで青年の頭にかつらを幾つかかぶせてみた。――
　夏代は声をあげるのをようやく呑みこんだ。
　「あなたは――」
　青年は愛しいものにでも出会ったように微笑んだ。
　「ご記憶でしたか？　ええ、その通りですよ。私は斉藤将志です」
　忘れるわけがない。貴文が左遷になった、くだんの事件の被告張本人である。直接顔を見たのはこれが初めてだった。夏代が知っているのは雑誌等に載っていた逮捕時の写真ばかりである。何度も見たはずだが、そう、当時は長髪で染めていたのだ。いま、夏代の目の前でブランコに乗っている青年はそれとは明らかに違い、どこか

超然としている雰囲気である。
　「上川判事の奥様でいらっしゃいますね？」
　将志は丁寧に会釈をし、そう言った。
　「あなたがどうしてここに？　それになぜ、私を知っているのです？」
　そして娘までも、と付け加えそうになったが、恐ろしくなってやめた。上川貴文という名前が公表されている以上、家族構成や住所を調べるのはさして難しくないのだ。斉藤一族には思想部が関与しているのである。
　「こちらにお掛けになりませんか？」
　隣のブランコを示す将志。夏代は首を横に振る。
　「時間が沢山あるわけではないのよ。質問に答えて欲しいわ」
　将志は頷いた。そしてまた遠くをぼんやりと見つめる。
　「こう言っても、信じていただけるかどうかはわかりませんが、半分は偶然だったのです。私の友人がこちらの町に住んでおりまして、たまたま訪ねてきていたのです」
　話の信憑性を云々する以前に、夏代には彼の言葉遣いの慇懃さが不気味であった。斉藤将志の裁判における言動や、判決言い渡しの際の狂乱ぶりは、その後、貴文の同僚などから聞いていたからだ。ここにいる青年の言動はそれとは正反対の、ホテルマンのような腰の低さであ

る。更生したのだろうか？　覚醒剤依存の治療もなされたはずだが、それも成功したのか？
　「いや、最初から話さねばなりませんね。私は刑務所で３カ月服役した後、今から約一年前に仮出所いたしました――」
　そう、意外なことに将志はあの判決に服し、控訴しなかったのである。控訴すれば執行猶予付き判決はおろか、無罪だってもぎとれた可能性が高かったのにである。罪を自覚し、判決を真摯に受けとめた、と解釈するなら喜ばしいことである。しかし、あの時の思想部をも巻きこんだ騒ぎは何だったのか。簡単に、額面どおりに信じられない。
　「私の刑期は６カ月でしたが、有り難いことに模範囚の評価を戴いたので、半分の３カ月で出ることができました。その後も保護司の方のご協力のもと、社会復帰のプログラムも良好に推移しております。こうして旅行を許されたのも、その証拠と言えるのです」
　たしかに筋の通った話ではある。刑期の計算もあうようだ。もし本当なら、夏代は彼女の性格として警戒感を緩めざるをえない。つまり、将志は社会が見守ってやるべき更生途上者であり、社会的弱者の一人なのだ。激しい敵意は抱けない。貴文の判決も無駄ではなかったことになるのだし……。
　「あなたの苦しい立場は理解できるわ。よく努力して

いらっしゃるようね。だけど――、いえ、だからこそ、紛らわしい行動は慎まなければならないはずよ。自分に有罪判決を下した裁判官の家族に接近するなんて、誤解を与えるような真似は危険すぎる話だわ」
　「李下に冠を正さず、という諺を自分も知っております。それについては弁解するつもりはありません。とくに奥様には恐怖感を与えたのかもしれませんね。しかし真意はもちろん違うのです。一度、上川判事にお会いして、謝罪し、感謝の言葉を口にしたいと、ずっと考えていたことなのです。あの時の自分はどうかしていました。覚醒剤の影響もあったのかもしれません。あのままの状態で生きていたらと思うと、今は心底、ぞっとします。そこから救ってくださったのが、上川判事なのです。刑務所のなかで冷静になって考えました。けっきょく判事だけが自分の将来を真剣に考えてくれたのではないかと……。この町への旅行が決まった後、偶然、判事ご一家がこちらに赴任していらっしゃると知りまして、もし可能であれば、お目にかかりたいと、その思いだけが先走ったのであります」
　「それはしかし――」
　被告人と裁判官の交流などは常識的にはほとんどない話であろう。何十年も時が過ぎていれば別だろうが、あの判決からはまだ数年も経ていないのだ。将志の気持ちもわかるが、やはり一線は引かれるべきなのだ。

「今はまだ、やめておいたほうがいいと思うのだけど」
夏代の言葉に将志は冷静だった。
「ええ、おっしゃる通りだと思います。今回の行動は軽率でした。ついついご自宅の近くまで来てしまい、偶然この公園で、お嬢様に遭遇してしまったのです。お友達との会話から、名前を耳に挟んだもので、話し掛けてしまいました。その前にご自宅の前を一度通ったのです。奥様はお庭で仕事をされていましたね。自分のこそこそとした真似は誉められるべきではありません」
「……」
真偽のほどはわからない。最悪の事態を想定して、毅然とした態度を取るべきなのかもしれない。夏代は母親としての責任と己のなかの人道主義的な部分――前科者への偏見を嫌うという――とで板挟みになる。
「巨乳――」
夏代は思い切って口にしてみた。
「は？」
将志はまったく動揺せずに聞き返した。
「娘に何か言いませんでしたか？　女性の身体の一部分を侮辱するような表現で」
「巨乳とは胸が大きいという意味ですか？」
その時初めて、将志の視線が夏代の顔から離れ、胸へ下りていった。その視線の感情のなさに、夏代は寒気を

覚える。この青年はやはりどこか異常なのではあるまいか。
　「さあ、記憶にありませんが。自分が奥様を拝見したのは、先程、お庭の仕事をなさっているときが初めてです。通りすがりにちらっと見ただけですし、奥様は屈まれておられましたから、お胸の大きさまではわかりようがなかったと思います。たぶん、お嬢様は何かと勘違いをなさっているのではないでしょうか」
　用意していたような弁明にも感じられる。しかし明日香はまだ義務教育就学前の幼児だ。彼女の証言を信用するのは母親だけだろう。自分の肉体を品評されただけ、損をした気分である。
　「あなたの更生の努力は支持しますから、今後は疑いを誘うような行動を慎んでください。約束して戴けますね？」
　夏代の凛とした口調に将志も同意した。夏代はひとまずそれで区切りとし、この一件は忘れようと言った。将志はブランコから下りて立ち上がり、深々と最敬礼する。威圧されるほどの背の高さである。１９０センチは越えているだろうか。
　夏代は一人残してきた明日香が急に気になり、走って帰ろうとした。将志に背を向け、振り向いた彼女は驚いた。そこに、遊歩道を塞ぐように、１０メートル足らずの距離をおいて、三人の若者がじっとこちらを見ていた

のである。三人とも丸坊主で、年齢も将志と同年齢に見える。
「彼らが自分の友人であります――」
いつのまにか、将志は夏代の傍らに来ていた。頭ふたつは大きな将志を見上げる。
「また驚かせてしまったようで恐縮です」
「いえ、別に……」
彼に今にも肩を抱かれるような錯覚を覚えた。夏代はえも言えぬプレッシャーを青年たちに感じながら、無表情で夏代を見つめ続ける彼らの間をすりぬける。
「――？」
彼らの身体から生ぐさい臭いが漂っていた。それが何なのか、夏代にはすぐにわかり、思わず駆けだして公園を出た。それは夫、貴文とのセックスのさいに、夏代の肉体やベッドのシーツに放出される、男性の精液の濃厚な臭いと同一だったのだ。
夏代は家に戻ると厳重に戸締まりをし、明日香を胸に抱いて恐怖感をこらえた。やはり悪質な復讐だったのか？　落ち着いて考えれば断定は出来ない。もしそうなら巧妙なやり口である。証拠は一切残らない。表面的にはなんら狂暴なところはない。心理的なプレッシャーだけで相手を恐怖に陥れる。夏代がどう訴えようと第三者には知りようがない恐怖。貴文にも信じてもらえるかどうか――

「ママ、痛いよ……」
明日香が腕の中で呻いている。
「ごめん、ごめんね」
貴文に報告すべきかどうかを含めて、夏代はその日一日、堂々巡りのような苦悩に落ちこまなければならなかった。

山本達巳のアパートを訪れ、ヘルパーとしての仕事を忙しくこなしている時間が、夏代にとってはかえって気分転換になった。
あの『事件』は貴文には言わずに置くことに決めていた。或いはまったくの、夏代の思い過ごしであるのかもしれない。もう一度、何かあった時は躊躇なく相談すればいい。彼もまた多くの仕事を抱えこんでいる。それに斉藤将志にしてからが、保護司がついている身分なのだ。そうそう問題を起こすわけにはいかないだろう。
「上川さん、今日はなんだか、ぼうーっとしてますね」
達巳が心配して顔を覗きこんでいる。
「明日香ちゃん、風邪でもひいたかな？」
夏代は慌てて我にかえり、達巳の心配を打ち消した。
「大丈夫、大丈夫。ちゃんと元気に遊んでいるわ」
手元から離すのは心配だったが、預け先の友人には家

の中で遊ばせるようにと念を押してきた。
「今日は雨だから散歩に出られないなあ」
ベッドの上で溜息をつく達巳。ここのところ天候不順なので家にこもりがちなのである。雨の中の散歩も健常者には風情があるのだが、抵抗力の弱い達巳には敬遠したほうがいい気象条件なのだった。ひと通り、家の中の仕事を終えた夏代も、さてどうしようかとベッドの傍らの椅子に腰掛ける。下肢のみならず、腕や手にも障害がある場合には就職の面でも非常に限られた選択肢しかない。そのうえ達巳には体力が極端に脆弱だというハンディもある。今のところ、職業訓練なども見合わせている状況である。長い長い、白紙のスケジュールが彼の行く手にはあるのだ。
「ゲームでもしようっか？」
反射神経を競うようなテレビゲームは無理だが、思考を巡らすボードゲームならじゅうぶん可能である。もっとも、それは夏代の苦手とする分野だけれど。
「上川さんと将棋をしてもねえ。一反木綿と相撲を取るようなものだからなあ」
「なんじゃそりゃ――」
湿った部屋に二人きりの笑い声が虚ろに響いた。達巳はしばらく沈黙した後、夏代にビデオをかけるように指示した。
「なんのビデオ？」

「うん、昔のテレビドラマだね。探してたんだけど、ようやく手に入ったんだ」
「へえー、楽しみだわ」
それは車椅子の青年が主人公で、障害者の恋愛の問題をわりとストレートに扱ったドラマであった。車椅子の青年の、健常者の少女への愛の破局を描き、自暴自棄となった彼は童貞を捨てるべく、夜の風俗店街へと繰り出すのだが、どの店でも障害を理由に断られ失意を味わう、際どいエピソードがクライマックスになっている。
「……」
テレビドラマに感情移入をする年齢でもないが、この主人公と重ね写しになる達巳の青春を思えば、改めて言葉を失ってしまう。達巳はそれを期待しているのだろうか。達巳が自分のヘルパーの時間にこのビデオを選択したのは、当然、何か意味があるのだろうと夏代は詮索せざるをえなかった。
「このあとはね――」と達巳は嘲笑をにじませながら解説するのだった。「かなり強引にハッピーエンドへ話をもっていくんだよ。健常者が作ったドラマだからね。そのへんが限界なんだな」
「ふーん、そうか……」
夏代はどういう表情をしていいかわからず、曖昧に答えるだけ。
「それでもこのドラマは頑張った方だと思う。障害者

の絶望感がよく描けているじゃないか」
　達巳はそう言うとビデオに見入っている夏代の横顔をじっと見つめた。生々しい素顔――化粧をしていない頬の肌に、ヘアピンでまとめられた頭髪からこぼれおちた一筋の黒毛がかかり、とても女性的である。まなざしは優しく賢さに満ちている。この切れ長の目を、達巳はとても愛していた。本当なら、彼女を困らせたくはないのだが――。
　「視聴率は芳しくなかったらしいけどね。どうしてだと思う？」
　「さあ……ストーリーが暗いからかな？」
　「違うね。主人公の障害者が死なないからさ」
　哄笑に近い勢いで笑う達巳。自虐的で皮肉な冷たさのこもった響きが夏代を沈黙させる。しかしどんな人間の心にも暗い闇は存在するのだ。障害者の達巳にだけ、それを非難する言葉を向けるのは健常者のおごりというものだ。夏代は長いボランティアの経験からそれを知っていた。こんなときは、いつも自分の無力を思って悲しみに沈むのである。
　「この主人公はまだ恵まれているほうじゃないかな」と達己。
　夏代はその魅力的な瞳に落ちてくる髪を耳へたくしあげた。
　「どうして？」

「少なくとも彼は自分の力で夜の街へたどり着く方法を保持しているでしょう。自宅を出て、タクシーをとめ、タクシーに乗り、タクシーを下り、歓楽街を彷徨う。彼の障害は、自分の童貞を捨てる挑戦権を行使する能力は否定していないんだ」
「――」
「上川さんだからこんなことを言えるんだけどね。わかるでしょう？　僕のヘルパーチームの中では、一番、話のわかるのが上川さんという意味だよ。他は駄目だな。男子学生だってうかつにこんな話は出来ない」
達巳はそこで口元を歪めるように笑う。そして続けた。
「――つまり僕にはその挑戦権を行使する権利すら剥奪されているんだな。タクシーの運転手は金を払えばどこにでも連れていってくれるけど、ボランティアは目的地がソープランドと聞いただけで、青ざめて同行を拒否するわけだ。中には説教するだけでは飽き足らず、組織に報告して査問にかけようとする輩もいる」
達巳が言っているのはヘルパー団体と障害者の間で交わされる最初の契約書のことだ。ヘルパーは障害者にとことん奉仕するわけだが、禁止事項はある。法律に違反する行為や営利目的に直接携わる行為などには奉仕できない。反道徳的行為も駄目。ソープランドへの送迎は売春の助長であるから公序良俗の違反である。ヘルパーは

達巳の男のエゴイズムには奉仕できないのだ。
「けれど、それは健常者のエゴイズムであるかもしれないでしょう？　あの主人公の青年と僕の間には、思想的道徳的な違いがあるのじゃなくて、ただたんに、障害が重いか軽いかの違いしかないのだからね。なぜ、僕は障害を理由に行きたい場所へ行けないのか？　警察だってよほどのことがないかぎり――スピード違反よりも寛大だろ――摘発しない場所なのに、だよ」
達巳は露骨に、自分をソープランドへ連れていってくれと、主張しているのだ。契約に目をつぶり、ヘルパー仲間に秘密で、フェミニズムに抵触する危険を端へ追いやって――。
一瞬だが、夏代は達巳の理屈に負かされそうになる。彼と付き合えば付き合うほど、彼の人柄を好きになればなるほど、出来るだけその意志を尊重したくなるのは、自然の摂理なのだ。彼の絶望感、焦燥感は痛いほど理解できる。その気になれば、女の自分でもその種の店の人間と交渉するのは可能だろう。だけど……。夏代はうなだれてこう答えるしかない。
「あの契約だって、そんなに自信があって作られたものじゃないわ。健常者もけっきょく五里霧中でしかない。今の時代に健常者と障害者が共生していくという事は、どういうことなのか、まだ始まったばかりだから、誰にも正解なんてわからないのよ。長い時間が必要だと

思う。理想的な方法が見つかるまでにはね」
　達巳は夏代から視線をそらし、窓の景色を眺める。
　「上川さんにしては陳腐なマニュアルだったね。まあ、物事の黎明期には犠牲が付き物だってことは、よくわかるけど、その犠牲がいつも障害者の側にばかり求められるってところが、とても不愉快なんだな」
　「いや、それは――」
　しかし達巳は不自由な手を動かして夏代の言葉をさえぎった。
　「――ごめんね、上川さんを困らせるつもりはなかったんだ。でもこれだけはわかってほしい。自分は童貞であり、これからも一生、健康な女性とは関係をもてないだろうと考えることが、男にとってどれほど辛い苦悩であるか。一度でいいからキスをし、裸体を眺め、乳房やお尻を愛撫したい……その願望はちっとも不潔ではないはずだ。どうか僕を軽蔑しないでください。上川さんにすら軽蔑されたら、本当に生きる気力をなくしてしまいそうだからねえ、僕は」
　夏代はこの達巳の率直な心情をどう扱えばいいのか、それこそ正解がわからない。ただ聞いて聞かぬ振りを決めこむのは彼女の誠実さが許さない。かといって解決策が見つからない以上、無責任な発言も出来ない。
　ほんの少し冷却期間をおいたほうがいいのかもしれないと夏代は判断した。

（私自身も色々なことが起きて疲れ気味なんだわ）
何事も真面目にやり過ぎると煮詰まってくる。夏代はヘルパーを一週間だけ休むことにした。

監視ログ

****135122　目標ｙ、ヘルパー業務終了。

監視サイト内ログ

「これは本部へ連絡すべきだろうな」
「ああ、『ヒビ』は確実に大きくなっている」
「あと一押しじゃないですか？」
「コーディネートしてみる価値はありそうだ。協力者の招集も要請しよう」
「おかあちゃんも、とうとう年貢の納め時だなあー。ビンタできるんですね！　僕は幸せですよ。頬骨がむっちりと浮いているところを……」
「十手の先でグリグリするんだろ？　おい、相手は素人なんだからな。やり過ぎは禁物だぜ」
「素人といっても、結構しぶとそうですからね、ギュ

ウギュウの目に合わせないと落ちませんよ」
　「かもな。あの女教師以来、久々に骨のある目標だってことは確かだ」
　「久々の上物だってこともな（笑い）」
　「女教師の時はニュウボウに────」

　　以下省略

　夕食の買い物を終え、持参した買い物袋に品物を詰めると、夏代は明日香の手を引いて駐輪場へ向かった。夕暮れ前のひととき、マーケットには主婦がとぎれなく訪れている。気候はまだ三寒四温だが、今日はその高いほうだろうか。傾きかけた日差しもまだかなり強くて、夏代は目を細めた。
　「ほら、明日香ちゃん、ちゃんと歩いて──」
　明日香は母親の腕にぶら下がったり、引きずられたりして、じゃれている。
　「もうあと一週間で入学式でしょう。甘えてると先生に叱られちゃうぞー」
　「いーもん、ママとずっと一緒にお家にいるから」
　幼稚園へ通わなくなってから、明日香はやや赤ちゃんに返っている傾向がある。ちょっと甘やかし過ぎかな？夏代は自問してみる。斉藤将志の威嚇行動があってか

ら、夏代は明日香が自分の目から見えなくなるのを極力避けるようになっていた。山本達巳のヘルパーを休んだのも――むろんあんな経緯があったのが直接の引き金だったが――明日香の安否が気になり、落ち着いて従事できないという判断も頭の半分にあったからだ。手元におく時間が長くなったため、明日香の『おかあさんっ子』ぶりが強くなってしまったのかもしれない。将志の影はあれ以降、感じてはいないのに。

（私も明日香に依存し過ぎているのかも）

一対一の関係が強すぎるとお互いに悪影響が出てくると、何かの本で読んだ記憶がある。

（そろそろ二番目の子供を作ってもいいかな）

最近、そういう希望が募ってきていた。出産直後はとても考えられなかったのだが、明日香に手がかからなくなってくるにつれ、強く思うようになってきた。貴文に真剣に相談してみようか。

夏代はわずかだが、身体が熱くなるのを自覚した。貴文に抱かれる感触が妙に生々しく思いだされたからである。そういえば、セックスはずいぶん間隔があいてしまった。結婚してから最長のブランクではないだろうか。

夏代は首をすくめる。

（性的なフラストレーションに陥るとは私もまだまだ若い――）

自転車にまたがると、サドルの当たる部分が意識され

た。今日はその感覚が鮮明である。夏代は達巳の顔を思い浮かべ、自分の気持ちを鎮めようとする。彼に比べれば、自分の状況などコメディの一幕にすぎないのだから。

「明日香、さあ、帰るわよ」

明日香が可愛い彼女の自転車に乗るのを確かめると、夏代はペダルをこぎだした。

家への道の途中に、達巳のアパートへ向かう道と交差する十字路があって、そこを通過するとき、やはり夏代は心を引かれる思いが疼く。夏代が休んだことで、ヘルパーのローテーションに影響が出ているのは事実であるが、これは短期間ならお互い様であるので、気にやむ問題ではない。心配なのは達巳である。口では理知的で気丈さを主張する彼だが、実際はガラスより繊細で壊れやすい心の持ち主なのだ。欠席戦術はちょっと過激すぎたかもしれないと、後悔もある夏代である。アパートに寄って覗いて行こうか――。いやいや、明日香もいるし、彼は大人なのだと思い直す。

住宅街の入り口まで来て、正面に公園が見えてきた。明日香のペダルをこぐ勢いが強くなった。子供たちの歓声が聴こえてきたからだ。夏代が許せば、夕飯までの時間、もうひと遊びできるかもしれない。数人の母親の姿も見えた。どれも近所の見知った母親たちで、買い物篭を下げて立ち話している。

ふと、夏代は交差点の反対側を確認した。歩行者専用に近い、バス・ステーションへ向かう通路――。
……気がかりな光景が夏代の視界に飛びこんできた。
いったんは行き過ぎかけたが、ブレーキを握り締める。振り返ると、それは見間違いではなく現実であった。
（達巳くん――）
達巳の車椅子が歩道を進んでいるのだった。こちらに背を向けていたが、道は緩やかにカーブしているので、側面が徐々に見えている。もちろん、一人ではなかった。四人の人間――男性ばかり――が車椅子を囲んでおり、遠目にも、彼らがヘルパーでないのは明白だった。なぜなら、四人とも、頭が丸坊主だったからである！夏代の知るかぎり、そんな髪型のヘルパーは登録されていない。
もはや間違いなかった。背の高さからして、車椅子の背後でそれを押しているのは斉藤将志であり、他はその仲間であろう。
身体中が怒りで熱くなる。すぐに飛んでいきたかったが、まず、明日香だ。公園で友達と遊んでいなさいと命令する。自宅の鍵も渡す。友達が帰るようだったら、一人で残っていずに、家に帰って鍵を開けて入っていなさいと、しっかり話した。主婦たちにもよろしくと念を押す。明日香は遊べるので嬉しそうに頷いたし、主婦たち

も日頃から夏代に好感を持っているので気安く請け合った。
　夏代は自転車の方向を回れ右させて、思いきりペダルを踏んだ。サドルからジーンズのヒップが浮き上がり、突き出され、左右に大きく揺れる。
　自転車はすぐに最高速度に達し、歩道を疾走した。達巳がどうしてあの男たちと行動をともにしているのか、そして斉藤将志がなぜ達巳に接近したのか、夏代の胸には合理的な筋道を飛び越えた、本能的な戦慄があった。卑劣な陰謀の予兆が眼前に展開されている――彼女の頭は切迫した感情に支配され、自転車のスピードを上げる行為にのみ集中するのだった。
　車椅子を囲んだ一団はのんびりと移動していたので、みるみるうちに差が縮まり、夏代は自転車をいったん車道へ出して彼らを追い越すと、行く手を遮るように前方の歩道へ乗り上げ、急ブレーキをかけて停車した。
　「――あれ、上川さん、どうしたんです？　驚いちゃったなあ」
　達巳の明るい声が響いた。
　「達巳くん――」
　混乱した昂奮と急激な運動に呼吸が乱れ、そう言ったきり、夏代はすぐには次の言葉が出てこない。
　「らしくないねえ。慌てちゃって」
　達巳の奇妙なほどの明るさ、さらに衣服のフォーマル

さ……ジャージではなく、小綺麗なセーターと紺のズボン……夏代は視線を小刻みに上下させる。すぐにその視線を背後で車椅子のノブを握っている斉藤将志へ向けた。視線は敵意にたぎった睨みになっている。夏代を見下ろす将志の表情は不気味なほど静かで、淡々としたものだ。夏代の突然の登場にも脈拍はまったく変化していないといったところ。別の三人はこれもあの公園での遭遇と同じく、能面の顔である。
　夏代は怒りを呑みこむようにして達巳に視線を戻すと、できるだけ落ち着いた口調で質問した。
　「どこへ行くの、達巳くん」
　「おや、挨拶なしでご質問ですか？　まるで母親みたいですね」
　「達巳くん！」思わず大きな声を出してしまう夏代。「ふざけてないで、質問に答えて！」
　達巳は夏代の剣幕に驚いて息をとめたが、すぐに不快な表情になった。
　「上川さん、勘違いしないでくださいよ。あなたは僕の保護者ではないんですからね。僕のプライバシーに介入する権利は認められていないでしょ。あの契約にもそう明記されているはずですよ」
　ニヤニヤする達巳。仕返ししてやったと軽い勝利感に浸っている。夏代は唇を噛みしめて頷いた。事情を知らない達巳の立場からすれば、そう主張するのは当然であ

る。再び視線を険しくて将志を睨み付け、額に垂れかかる髪を掻きあげた。軌道修正し、改めて懇請する。
「この人たちを紹介してくれないかしら？」
すると不機嫌だった達巳の表情がパッと明るくなり、ああそうだね、と陽気に答えた。背後の将志を障害のある手で示した。
「斉藤将志さんだね。僕の友人です。こちらは上川夏代さん、僕のヘルパーの一人で――」
「友人？」声がまた大きくなる夏代。
「どうもおかしいなあ、今日の上川さんは。まるで重度の障害者に友人がいたらおかしいみたいな態度だよ。中年のヘルパーさんじゃあるまいし、上川さんに限ってそういう偏見はないと思ったんだけどなあ」
「友人って、どこでどう知り合ったって言うの？」
やはり夏代は冷静になれず、達巳の感情を無視して頭ごなしに問いただしてしまうのだ。達巳は前よりもいっそうひどい機嫌の悪さになった。
「いや、もうけっこう。時間もないことだし、ヒステリーに付き合ってはいられないよ。斉藤さん、さあ、急いでいきましょう」
達巳は夏代を切り捨てて将志との関係を優先する判断を下してしまう。その達巳の態度には将志に対する信頼がこもっているようで、夏代はいっそう狼狽し、待って、と叫びかけた。しかし車椅子はまだ動き出しはしな

かった。代わりに将志の手が優しく達巳の肩に置かれた。達巳の不機嫌さを落ち着かせるような、いたわりのあるアクションに見える。
　「斉藤さん、どうしました？」
　「実はね、山本くん――」と、将志は静かな口調で語るのだった。「僕とこちらの上川夏代さんはこれが初対面ではないのですよ」
　えっと達巳は驚いて夏代の顔を見た。口元を厳しく結ぶ夏代。
　「悪かったですね。すぐに言えば良かったんだけど、上川さんの奥様が君のヘルパーだったとは、あまりの偶然にびっくりして声が出なかったんだよ」
　偶然？　そんなわけはないと夏代は小さく首を振る。
　「知り合いだった？　二人が？　へえー」
　信じられないでいる達巳に、将志は平然と告白するのである。
　「うん、そうなんだ。それもちょっとわけがあってね。奥様は僕のことをあまり好いてはくれていないんだよ。だから大事な君が僕たちと一緒にいるところを見て、怒っていらっしゃるんだ」
　「わけ？　なんですか、わけって？」
　「そうだな。もちろん１００％、僕に非があることでね。奥様の行動はヒステリーでもなんでもなく、正当なものなんだよ」

「友人なのにちゃんと話していないようね」
夏代は皮肉っぽく口を挟んだ。一見、誠実に聴こえる将志の告白だが、達巳の信頼を獲得しようとする策謀であるように思えたのだ。
「上川さん、そういう言い方はないでしょう。僕らは知り合ってまだ日が浅いんだから。知らないことがあるのは普通ですよ」
達巳の将志への信頼はすでに深いものになっているようである。
「まあ、山本くん、そうツンケンしないで。悪いのは僕なんだから。僕にはそう思われても仕方がない過去があってね。その過去を奥様はご存じなんだから」
「はあ、段々、わかってきたよ。上川さんの旦那さんは裁判官だものな。でも、たとえそうだとしても、これは斉藤さんや上川さんの問題ではなくて、僕の問題じゃないの。僕が誰と付き合ったからって、その結果がどう予想されるからって、ヘルパーに意見する権利がないのは変わらないはずさ」
「達巳くん、違うのよ。ちゃんと私から説明するから、とりあえず引き返しましょう。この人たちには帰ってもらって」
夏代の言葉に達巳は心底からの怒りをあらわにした。
「そんな権利は上川さんにはないって言ってるだろ！わからない人だなあ！」

　声を震わせて怒りを炸裂させる。夏代はたじろいで沈黙せざるをえない。
　「僕は斉藤さんと一緒に行きたいと思ったから行くんだよ。友人としか行けないところにね！」
　さあ、さっさと行きましょう、と達巳は将志を促した。しかし将志はびくりとも動かない。
　「山本くん、君の言っていることはまったくの正論だ。何も間違ってはいない。でもね、世の中、正論や真実ばかりでは成立していないんだよ。そればかりではいずれ壁にぶち当たり、身動きがとれなくなる。猪突猛進に正義を主張すると手痛いしっぺ返しを食うのが世の中ってものさ――」
　そこで初めて将志は夏代に向かって笑みを見せる。
　「――だからどうだろう、僕と君の友情が不変であることを確認したうえで、ここはいったん奥様の意見に従ってみては？　雨降って地固まると言うじゃないか。友情というのは困難が多いほど、固い絆が生まれてくるものさ。奥様だってもちろん君の身を案じているからこそ、こうして自転車ですっ飛ばして来てくれたんだから」
　しかし達巳は軽い興奮状態にあるらしく、将志の言葉を拒否して、何度もこのまま行くと主張した。
　「大丈夫、大丈夫。僕らはいつだって会うことが出来る。どこへだって出かけられる。世間もそのうち理解し

てくれるはずだから」
　将志はそう言い残すと、三人の仲間とともに、夏代に丁寧なお辞儀をして、立ち去っていくのだった。
　残された二人――。
　達巳は無言で横を向いてしまっている。無念さが彼を包んでいるに違いない。だがこうでもしなければ、達巳にどんな災いが振りかかるか、わからないのだ。しかも自分のせいで。夏代は今晩、貴文にすべてを打ち明ける決意をした。手を打たなかったばかりに……、後悔の念が夏代にのし掛かってきていた。そして斉藤将志に対する怒りも。彼らが自分と達巳の関係を破壊しようと動いたのは明らかである。偶然なんてありえない。周到に、しかもここでもまた、誰にも文句を付けられない方法で、である。
　「突っ立っていても仕方がないから、アパートまで押していくね」
　この状態で話しても反感を買うばかりだろう。夏代は組んでいた腕をほどき、ゆっくりと車椅子の後ろへ回る。ブレーキを外して、方向転換させた。気まずい無言の行がアパートまで続いた。

監視ログ

****153152　目標ｙ、固定監視点ａに到着。撮影開始。

　車椅子を部屋へ上げ、夏代はそのまま自分も椅子に座り、達巳と向き合った。できるだけ正直に、裁判の最初の頃から順を追って話し始めた。達巳は依然として夏代と視線を合わさずにいる。
　「……達巳くんの自由な行動を妨げたのは事実だから、それについては弁解の余地はないわ。謝ります――」
　頭を下げる夏代。
　「でも、これは本当の話しなの。彼らは何かの魂胆があって私たちに接近しているのよ。偶然なわけがないわ」
　達巳はようやく夏代を見据えた。
　「偶然は説明がつかないから偶然なんだよ」
　夏代は首を振る。「この場合は違うのよ」
　「上川さんも言っているとおり、証拠は何ひとつ、ないんだからね。証拠もなく犯人扱いじゃ、人権侵害もいいところだろ」
　「彼らとはどうやって知り合ったの？」
　「四日前に僕の親戚の紹介で知りあったんだ。前から年齢の近い、ちょっと、ヘルパーにはいないような毛色

の人間を友達にしたいって頼んであったんだよ。理想的な人選だと思うね」
　「その親戚って、どういう人かな？」
　「なに？　今度は事情聴取？　さすがは裁判官の妻だね。僕も犯人の一味ですか？」
　「大事なことなのよ。ね、答えて」
　達巳はそれには返事をせずに、嬉しそうに鼻をクンクンさせている。
　「何か匂わないか？」
　夏代も部屋に入った当初から、この部屋ではかいだことのない匂いが空気に混じっているのに気がついていた。神経を向けてみると、正体がわかった。
　「――煙草ね――」
　達巳は吸わないから、将志たちのものであろう。
　「洋モクだよ。僕も初めて一本、吸ってみたんだ。遊びで吸ってみたことはあったけどね、一本全部というのは初めてだったな」
　達巳の表情からして悪い体験ではなかったのだろうが、喫煙は体調には確実にマイナスであると、医師からの指示にもある。
　「まあまあ、そんなに恐い顔をしないで、野暮は言わないで欲しいね。たったこれだけのことも、ヘルパーには頼めないのだからさ。つまり友人の有難みというやつを満喫しただけだよ」

悪戯っぽく笑う達巳に、夏代は普通なら反論しなかっただろうが、今は違う。今は緊急事態なのだ。
「それが彼らの魂胆のひとつだわ。あなたを駄目な人間にする気なのよ。私と関わりのある人間、上川家と関わりのある人間に手を伸ばして破滅に導き、間接的に私たちに復讐しようとしているんだわ」
「破滅とは、ちと、大袈裟じゃないの。煙草一本くらいでさ。あ、その破滅説を裏付けるのかもしれない、もうひとつの証拠があったな」
達巳は夏代に、ベッドのしたに収納されている衣装ケースから一本のビデオを取り出すように言った。
「上川さんも僕のプライベートに介入するという強権を発動したんだから、僕も反撃させてもらうよ。やられっぱなしじゃね」
達巳に言われるままに、夏代はそのパッケージの白箱からビデオを抜くと、デッキにかけてみる。再生ボタンを押すと、いきなり全裸の女性と男性のセックスシーンが映し出された。無修正の裏ビデオにちがいなかった。
夏代はアクロバチックな体位と男女の過激な運動に、すぐに目を背けた。
「思いっきりセクハラなんだろうけどね。今の上川さんの羞恥心の何百倍もの恥辱感を、今日の僕は味わったんだよ――」
夏代は目を背けたまま、ビデオのスイッチを切った。

「わかってるわ。じゅうぶん理解できることよ」
「駄目人間に落ちぶれる、というより、普通の男に復帰する、そんな感覚なんだけどな。この程度はさ」
「これは階段の一段目でしかないのよ。どんな方法を企んでいるか――、彼らにはね、日本の秘密諜報機関と言われる思想部がついているのだから。卑怯な策謀なら、思想部の右に出るものはないのよ」
夏代はそこで思想部がこれまで関与されたと噂されている事件の数々を、こと細かく解説するのだった。
達巳は再び、貝のように押し黙った。時間だけが無為に過ぎていく。
「――上川さんはそろそろ帰ったほうがいいね――」
しばらくして達巳はそう言った。時計は五時に近づいている。
「ええ、そうするわ」立ち上がる夏代。「達巳くんなら理解してくれたと思うから、もう何も言わないわ。連中は汚い軍隊なのよ。それだけは知っておいて頂戴」
「……ヘルパーの事務所に電話をしてくれないか。今夜は遅くまで家に帰らない予定だったから、担当を断っていたんだ」
「ええ――」
事務所への連絡を終えると、達巳をベッドに戻さなければならなかった。どんなに関係が険悪になっても冷却しても、この『抱擁』だけは無視も省略も出来ない二人

なのである。
　夏代はいつもの手順で車椅子を固定すると、両脇を拡げて身構える達巳に『抱きついて』いくのだった。相撲で言えば、両差しの組み合いである。両腕を彼の腋の下へ差しこみ、その背中でがっちりと組んだ。当然、自分の顔は彼の顔と密着せんばかりに接近する。たしかに、ヘルパーと障害者の関係を一歩でも逸脱してしまうと、この態勢を維持することに平静ではいられない。達巳の鼻息が首筋へふきかかる。髪はきっと彼の顔をくすぐっているだろう。障害者だって体付きは男性そのものではないか。骨が固くて、横巾が圧倒する感じである。乳房が押しつけられている胸板もやはり男のものだ。
　夏代は両足を踏ん張り、腰に力を入れて、号令をかけると同時に、反動をうまく利用して達巳を立ち上がらせる。達巳の下肢に残存している僅かな筋肉の力が、夏代の身体と力に支えられて、ようやく自分の体重を直立させた。綱渡りをしているような作業。バランスが不安定で、身体の揺れの振幅が大きい。夏代はそれをうまく調節しながら巧みに彼を車椅子の位置から２、３歩、移動させる。そのまま腰をおろせばベッドの端に座ることができる。いつもなら、そこで達巳は全身の緊張を解き、ストンと落ちるように座るのだが……。
　「？――、達巳くん？」
　夏代はなかなか力を抜かない達巳に驚いた。時間を正

確に計測すれば、二秒もかからない抱擁直立の状態のはずが、大幅にそれを越えている。女性の華奢な足腰では彼の体重を支えるのは限界がある。ふくらはぎがブルブル痙攣してくるのがわかった。腰にだるさが集まってくる。夏代は達巳を押して、強引に座らせようとした。マニュアルでは戒められているのだが仕方がない。だが、こちらの押す力を上回る反発力が達巳の身体にみなぎっているのだった。

「達巳くん！」

それに達巳の体重が夏代を苦しめた。こうして密着してしまうと、体重差の圧力は数字以上の重圧となってくる。不自由な手足でも、圧力を一点にかける行為はそれほど困難ではないらしい。

達巳は自分を押し倒そうとしている！

「達巳くん、駄目よ、駄目――」

全身の力で突き飛ばそうとすれば可能かもしれない。或いは、自分だけ一気に後退すれば、達巳は前面から転倒するかもしれない。しかし障害者に怪我をさせる危険は夏代には本能的に選択できなかった。

突然、嗚咽が聴こえてきた。演技でないのはすぐにわかった。涙が夏代の首筋に落ちてきたからである。達巳の哀切な心情が伝わってくると、夏代は急に押し返す力を失っていった。まず膝が崩れ、一気に傾斜した自分と達巳の体重を支えられず、続いて腰がくだけた。フロア

リングの床に二人は折り重なって倒れた。夏代は腰と背中を打ったが、頭はなんとか無事であった。夏代の上にのしかかったまま、達巳は身動きしない。彼女の胸元に顔を埋め、嗚咽を繰り返している。
「達巳くん、大丈夫？」
自分の身体がクッションになって、達巳はおそらく何のダメージも受けなかっただろうが、たしかめずにはおれない。
「……御免よ……御免よ……」
達巳は声を震わせる。
「上川さんの言うとおりなんだ。みんな上川さんの言うとおりだったんだ……」
恐々と顔を上げた。涙で目が真っ赤である。
「あいつらは最初からそのつもりで……。僕の親戚は思想部ではないけれど、内務庁に物品を納入している零細企業で、きっとその立場に付けこまれたんだろう。すべて仕組まれていたんだよ……」
嗚咽が大きくなった。
「へへへ……今日、連中とどこへ行く予定だったと思う？　ソープランドだよ、わかる？　僕は童貞を捨てるために、こんなにめかしこんで……まるでピエロだよ……連中におだてられて……その気になって、上川さんを陥れる道具に利用されているとも知らないで……連中に嘲笑されているとも知らないで……」

　まるでピエロだとまた繰り返し、涙を流した。夏代は達巳の肩をつかんだ。
　「あなたのせいじゃない。あなたのせいじゃないのよ」
　「ああ、僕はどうすればいいんだ、ベッドの上で一生、おとなしく座っている人形のままでいればいいのかい？　ねえ、上川さん、ああ……」
　達巳はそのまま目を閉じて、夏代の顔に向かって顔を近づけてくるのだった。
　夏代は達巳の肩をつかんだまま、しっかりと目を閉じた。恐怖はない。どうして達巳を拒否できるだろう。そんなことは誰にだって出来ないはずだ。
　「ああ、夏代さん、夏代さん――」
　二人は唇を重ね合わせた。柔らかな夏代の唇が触れると、その一点から至福の官能が全身へ拡がっていくようだった。最初は少し冷たかったけれど、すぐに気にならなくなり、唇だけでなく、顎や頬や鼻が触れ合うごとに女性の肌の素敵さに興奮した。夏代の化粧のない肌は優しくて、おとなしい色香が匂ってくる。
　――達巳の手が自分の胸をつかもうと躍起になってきたところで、夏代は身体をねじり、達巳を拒否しなければならなくなった。これ以上は自由にさせられない。夏代は達巳の身体の下から身を起こした。達巳はうつ伏せのまま、欲情に中断させていた嗚咽を再開した。

「悪かった……悪かったよ、上川さん……」
「いいえ――」と夏代は彼の背中に手を置きながら続けた。「あなただけ、悪いのじゃない。これは二人の責任だわ。誰にも打ち明けられない秘密のね」
「僕はわかっている。上川さんの気性を考えれば、あなたはもう決断しているのだろう？　こうなってしまった以上、僕のヘルパーから降りることを。白々しく、何事もなかったかのように、これまで通りの介護者と被介護者の関係を続行していくなんて、真面目な上川さんには無理だものな」
夏代は手を背中にあてたまま、無言である。
のそのそと、達巳が動きだした。這うことは不可能ではなかった。彼は時計の分針くらいの速度で一回転し、ようやく夏代に頭を向けた。腹這いのまま顔を上げ、夏代を見つめる。
「これで終り。これでお別れなんだ。もうあなたに会う機会はない。だから僕はどこまででも卑屈になれる。どんなに惨めでも、上川さんの前でなら、かまわない」
達巳は頭を下げた。額を床にこすりつけるのである。
「お願いだ。お願いします。これが最後のお願いです。上川さんの、夏代さんの、胸を僕に見せてください。それだけでいいのです。この目に焼き付けておきたい、僕が初めて愛した女性の胸を……」
お願いします、お願いします、と何度も何度も懇願す

る達巳。音がするほど、額が床に当たった。
「惨めになっちゃ駄目だよ、達巳くん。人間は卑屈になんか、なる必要ないんだから」
夏代は微笑を浮かべながら立ち上がり、ベルトを緩めるとＴシャツの裾をたくしだし、腕を交差させてそれをつかんで一気に頭から抜き取った。ブラジャー姿の夏代だ。ベージュ色の地味な下着――ストラップのかかった肩から、鎖骨の浮いた薄い胸元が瑞々しく輝いている。しだいに盛り上がる乳房をブラジャーの豊かなカップが包みこんでいた。背に両手を回してホックを外すと、夏代は躊躇なく、胸を露出させた。窓から差しこんでいる日差しが、剥き出しの肌の産毛まで透かしてみせる。息を呑むような美しい乳房。腹に影ができるほど、大きくて張っており、綺麗な円の集合体である。肉丘の重心が中央へ寄っていて、さらに深いところにあるらしく、可憐な安定感もある。先端にいくにつれて尖り、若々しい乳輪の中心に、ぽつんと乳頭が突き出ているのだった。
「――」
達巳は声を失って見惚れている。この感覚は何だろう。心がすうーっと洗われていくような気分である。淫らな関心は少しも起こらない。股間も熱くなりはしない。幸福？　そう、とても幸福な感情に包まれている。風のように、川のせせらぎのように、自然な流れが達巳の身体を循環しているのだ。

　これほど素晴らしい女である夏代が、この先も健やかに暮らしていってくれるよう、達巳は素直な気持ちで願うのだった。

監視ログ

****164302　目標ｙ、帰宅。撮影終了。

監視サイト内ログ

　「よっしゃ、これは完璧だろ」
　「ここまでやってくれるとは、正直、驚きですね」
　「これだけデータベースがたまれば、あとはどうにも料理できるってもんさ」
　「しかし風呂場で見るおかあちゃんのオッパイより、ひと回り、巨乳に見えたのはどういうこと？」
　「相手が自分の娘であるか、他の男であるかで、気合いも違ってくるってことだよ（笑い）」
　「そういや、乳首の勃ち具合がちょっと固めだったような気もする」
　「何カ月かぶりのキスの後だったものなあ。しかたないっスよ、女ですからねえ」

「とにかくこれで山は越えたわけだ。みんな、長い間、ご苦労さん！」
「本部に連絡だぜ。ゴー。サインはゴーだ。部長の奴、喜んで椅子から落ちるんじゃないか」

以下省略

お前、大丈夫か？　と、貴文が食事の最中に案じるほど、夏代は元気が出ない。
「ううん、問題ない。どこも悪くなんかないよ」
「そうか？　顔色悪いぞ。やっぱりヘルパー辞めたのが、良くなかったんじゃないの？」
夏代は内心びくりとしたが、笑ってその場を誤魔化した。貴文には核心部分は伝えていない。ただ、ヘルパーの人数が足りているので、明日香の入学準備もあるから一時休止すると言ってある。どんな状況でもボランティアを中断することのなかった、それまでの夏代だから、貴文はちょっと驚いているわけだ。元気がないのをそのせいにしている。
夫の予測の半分は当たっている。ボランティアの倫理を冒してしまったのはその通りで、これはしかし、その任務を辞職したことでとりあえずケジメはついたと納得できる。つまり、かえって山本達巳の苦悩を深めただけ

かもしれないという後悔があるのだ。あれで気持ちをふっきってくれればいいが、それは楽観的にすぎるようにも思えるのである。今から思えば、ずいぶん非常識であった。あそこはすっぱりと、すべてを拒絶するのがベストだったのではないだろうか……。
　ああいうハレンチな真似をした自分に夏代は自己嫌悪を感じていた。あの時は避けがたい成り行きに思えたのだけれど。他に方法はなかったのかと自問する毎日である。
　夫に対する後ろめたさも募っていた。どう弁解しても、性的な行為を夫以外の男性としたのにかわりがない。
　そんなだから斉藤将志の一件も報告できずにいる。報告すれば、けっきょくすべてを話さなければならなくなるだろう。
　「やっぱり――」と、貴文は明日香がテレビに夢中なのを確認して声をひそめる。「入学式、行けそうにないよ。ちょうど出張の時期と重なるんでさ」
　「ああ、そう、しょうがないわね――」
　「……」
　あまりの呆気のなさに貴文は夏代の顔をしげしげと見つめた。てっきりまた怒られるかと覚悟していたのだ。
　「明日香には私から言っておくから、お仕事、頑張ってね」

　なんかおかしいな、と思いながらも貴文はそれ以上、妻の心中を詮索しなかった。すぐに自室へ引きこもり、仕事に没頭するのだった。

第三章　舞う桜

　うららかな春の朝――とうとう入学式の日がやってきた。
　明日香は目覚めたときから躁状態で、家中を跳びはねている。彼女にいっちょうらの衣服を着せ、そのうえ自分も正装をきめるのは重労働であった。貴文は予定どおり、昨日の朝から出張でいない。しかも夏代の悩みも解消されたわけではない。ヒステリーを起こしてもおかしくないような状況だったが、それでも、今日だけは、夏代の心は穏やかで祝福の心に満ちていた。
　あの明日香が小学生なのである。
　感無量の気持ち――。唄ったり踊ったりしている明日香を眺めていると、化粧の手を休め、たしなめるのも忘れて、出産の日を思いだしたりする。安産だったけれど、やはりそれ相応の苦しみはあった。やっとそれから解放され、初めてこの手に抱いた明日香はあまりにも小さく、あまりにも、しわくちゃだった。その赤ん坊が小学生に……。

「明日香、ちゃんと入場行進、できるの？」
「だいじょーぶ！　ほら、一二、一二――」
鏡の前で化粧をしている母親に、明日香は元気良く手を振って足を上げて行進の予行練習をして見せる。
夏代は笑いながら化粧に戻った。パットで頬を叩いてファンデーションを塗る。明るい感じに仕上げるつもりだ。鏡に写る自分の顔――最近の心労で、やはりどこか、くすんでみえる。
（美人さんだけど、歳も三十路だし、一児の母だし、夫はかまってくれないし）
夏代はお腹のなかで苦笑しながらパットを叩いた。ファンデーションだけでも夏代の美貌はすぐに浮き立った。
「ママ、綺麗」
母親の顔を見上げながら明日香が言った。母親の化粧には前々から異常な関心を示している。久々の化粧、それもずいぶん念入りなので、傍らから離れようとしない。
「まだまだ、もっと化けなくっちゃ、ね」
夏代はウインクしながら言い、明日香に、これが口紅だ、これがチークだ、これがマスカラだと、道具を教えてやる。明日香は大喜びして、それらを使うごとに美しさを増していくママにうっとりするのだった。
化粧だけでなく、身に付ける衣服も、いつもとは格段

の開きがあった。ジーンズやＴシャツではない。スカートとジャケットが揃いのピンク色のスーツ。ジャケットのインナーには、襟のついた純白のブラウスを着こみ、上からひとつめのボタンを外して覗ける胸元には細いネックレスまでかかっているのだった。髪だって後ろで縛っていない。ちゃんと元の長さをさらけて、しなやかに肩にまで垂らしている。前髪にはウエーブがかかっている。
　そしてこの匂い――。ママのいつもの匂いよりももっと、胸が詰まるような匂いである。パパが去年の誕生日にプレゼントした香水であることは、まだ明日香は知らなかったけれど、ママがそれを手首に、とても嬉しそうにつけているのは見ていた。テレビに出てくる女優さんのようになったママと手をつないで、小学校へ行くのだと思うと、明日香は誇らしくて嬉しくて、再び部屋中を跳びはねるのである。

監視ログ

****091427　目標ｙ、目標ｚ、登校中。

監視車内ログ

「やっぱ、正装っていいなあ」
「ふふ、いつもはジーンズ姿がほとんどだ」
「足が見えるってのは基本中の基本と思ってもらわねえとなあ。見ろよ、あのハイヒールを履いた足。ふくらはぎがぴーんと張り詰めちゃってさ」
「美しさに緊張感があるって言うんですかね」
「幸せなんじゃねえのか。女はそういうの、敏感だから」
「おかあちゃん、一昨日、亭主に幸せにされたんじゃねえの？」
「ブー、外れ！　セックスレス新記録更新中です」
「ちぇっ、基本を知らんのかよ、出張前の夜には女房を燃え上がらせて、浮気心の芽を摘んでおくのが男ってもんだろうがよ」
「おとうちゃんもおかあちゃんもインテリだから、そういう真似はしないんですよ」
「ケッ、下半身にインテリも糞もあるか。基本を忘れると後悔することになるんだぜ」

RING RING RING……

「本部から連絡がありました。民間協力者３名、当該式典への侵入に成功しました」

「ああ、いとしのおかあちゃん、絶体絶命の大ピンチ！（笑い）」

以下省略

心地好い春風に乗り、散った桜の花びらが歩道へ落ちてくる。それを踏み締めながら、明日香はしだいに緊張してきたようだった。夏代の握る花びらのような彼女の手が、力一杯、握り返してくるのだ。小学校の校門が近づいてきた。夏代と明日香と同じような母子が、ぞろぞろと集まってきている。父親の姿もけっこう目立つが、それについて明日香がぐずることはななかった。ちゃんと言い聞かせたし、彼女も納得していた。

ほとんどの家族が校舎や校門を背景にして記念撮影に興じている。そうだ、私たちも写真を撮らないと――。それで明日香もリラックスできるかもしれない。カメラは持ってきていた。シャッターを切ってくれる人はいないかしらとキョロキョロしてると、背の低い中年の紳士が寄ってきた。

「お、記念写真ですか？　どれ、私でよければ撮ってさしあげますよ」

柔和な笑顔が印象的な愛想のよい男である。子供は見受けられなかったが、彼も父兄の一人なのだろう。夏代

はお願いすることにした。青葉が茂る高木の下で、二人並んで立つ。
「ハイ、そのまま、そのまま……」
男はカメラを構え、ファインダーを覗きこんでシャッターに指を置いた。
「奥さん、もうちょっと笑ってください」
笑顔を作っているはずだが、男はそう注文する。夏代は戸惑いながらも微笑んだ。
「ハイ、チーズ――」
シャッターが切られた。
「お二人ともお美しく撮れましたよ」
カメラを夏代に返しながら、男はにこやかに笑う。厚い唇が割れると煙草に焼けた黄色い歯並びが露出した。
「父兄の方……ですよね？」
礼をした後の夏代の質問に男はええ、ええ、と何度も頷いた。
「クラスは何組ですか？」
「クラス？　ああクラスね。うーん、僕は女房に任せっきりだからなあ。そういうのはどうも……」
誤魔化すように明日香の頭を撫でる。
「おじさんの息子と同じクラスだといいね」
そして妻と子供を探すからと、校舎の中へ小走りで消えていった。
（いずこの亭主もあんなもんか――）夏代は肩をすく

めながら受け付けのテントに向かう。その途中で、同じ幼稚園にいた子供を見つけて、明日香は少し明るさを取り戻した。夏代の顔見知りの母親もいた。受け付けが済むと、腕に腕章を巻いた教員が父母の印として薔薇の花のリボンを夏代の胸につけた。

母子はここでとりあえず別れなければならない。明日香はクラスに行き、担任の教師や友達と会うのだ。夏代はこのまま式典会場の体育館へ行って児童たちが入場してくるのを待つ。紅白の幕に囲まれた会場にはすでに来賓や父母が来場していて椅子席に座っていた。

夏代はそれでも前の方の席を確保できた。夫婦二人連れでなかったので、一個しかない空席がとれたのだ。

（怪我の功名というべきかな）

会場の中央には左右に分れて在校生も並んでいる。たぶん二年生か、三年生の一部なのだろう。数十人の児童が行儀良く腰掛けていた。中央に出来た通路が新入生の入場してくる花道らしい。夏代は自分のことのようにドキドキしてそれを待ち受けた。

いよいよ式が始まると、軽快な音楽とともに新一年生が行列して入ってきた。青色のリボンを胸につけた教員が先頭の子供と手をつないで誘導している。

明日香は三組だ。

（来た、来た――）

前から四番目にひときわ手を大きく振っているのが彼

女である。高校野球の入場行進のようになっているが、元気良く、コチコチにもならないで、さすがは我が娘と誉めてやりたい。夏代は夢中でシャッターを押しまくった。そして目頭が熱くなってきた。もちろん娘の成長を実感したのもあるが、それとは別に、人間とはなんて素晴らしいものだろうと、純粋に思える場面との遭遇が感動的なのだ。懸命に手足を動かしているこの子供たちの姿を見て、なんとも感じない人は稀であろう。

（明日香、ありがとう――）

夏代は心の中でそう囁いた。

式典は無事終了し、児童たちは教室へ帰った。そこで自己紹介や担任教師による学校の説明、教科書の配付などが行われる。父母も教室内に入っていいことになっているので、当然、夏代もそちらへ向かう。明日香のクラスは四階建ての校舎の二階にあった。廊下の壁には習字や絵画の作品が貼り付けられていた。懐かしい小学校の記憶が甦ってくる。下駄箱の匂いはなんとも微笑ましい。

他の父母とともに並んで階段をあがっていき、二階の廊下に来るとすぐに教室の明るいざわめきが聴こえてきた。明日香はもう姉御肌を発揮しているのだろうか。

突然、夏代は肩を叩かれた。振り向くと、若い男性がお辞儀をしている。

「上川さん、ですね？」

「はあ？」
　男性が胸に青いリボンを付けているのを確認する。教員のようである。
「上川明日香ちゃんのお母さんですね？」
　角刈りで身体もがっちりとしたその教師はもう一度訪ねた。
「はい、そうです。上川明日香の母ですが、何か？」
　夏代は一瞬ドキリとする。まさか明日香の身に何か異変でも？　しかし教師が穏やかな笑みを浮かべているのを見て、やや安心を取り戻す。
「ちょっとこちらへ――」
　男は夏代を父母たちの行列から廊下の隅へ連れていった。男は、自分は体育担当の山崎というものです、と、自己紹介した。
「実は明日香ちゃんの就学時前検診の診断書について、うちの校医からお母さんに、２、３質問があるとのことなんですがね」
「え？　どういうことでしょう？」
　夏代の顔が曇る。この検査は、義務教育に就学する子供が受ける身体検査で、文字通りのものであるのだが、明日香に病変が発見されたとでもいうのだろうか？
　夏代の不安の感情を察知したらしく、山崎はそれを打ち消すように何度も手を振った。
「いやいや、ご心配はいらないと思いますよ。たぶん

書類上の問題でしょう」
　記入漏れでもあったかな、夏代は首をかしげたが、山崎は、すぐに済みますからとさっさと歩きだしてしまう。その後ろを夏代はやや遅れてついていく。
　「あの、本当にすぐに済みますでしょうか？」
　「ええ、ええ、大丈夫ですよ。確認だけですから。でも家族の方に直接聞かないと、意味ないわけでしてね」
　夏代としては明日香が教科書をもらう姿を目にしたかったのだが、問題が検診となると後回しにするわけにもいかない。
　「保健室は四階にありますもんで、こちらの階段から――」
　二人は階段を上っていく。喧騒が次第に階下へ遠ざかっていった。三階から上は高学年のクラスであるらしく、彼らは入学式には出席しないのだ。
　「こちらです」
　四階につくと山崎は廊下を歩きだす。
　しーんとした教室と廊下――。
　夏代のヒールの音だけが響いている。
　廊下の窓からは校庭が見下ろせる。
　あのミズナラの木の葉が風に揺らいでいた。
　「何となく寂しいでしょう？　少子化で、空いている教室が多いのですよ」
　山崎は呟いた。

「そのようですわね」
「女性にはもっと頑張って子供を産んで戴かないと」
「はあ――」
教師のくせにつまらないことを言う男だと、夏代は皮肉の感情を彼に向けた。
「おや、校医が自ら、出てきましたよ」
見ると、白衣を着た男がこちらに歩いてくる。白髪まじりの、中年以上の年齢のようだ。
「校医、こちらが上川明日香ちゃんのお母さんです」
山崎が夏代を紹介した。校医は一礼した。
「わざわざお越し戴いてすみません。ただの確認なので、こちらから行くべきなのかもしれませんが、人目のあるところで話すのもまずいかと思いましてね。お子さんの健康の問題は小さなことでもプライバシーを守らねば、と考えております」
夏代は頷いた。主旨は間違いではない。しかし夏代にとって重要なのはその内容であり、どれだけ早く明日香の教室に戻れるか、である。
「それで――、どういった問題なのでしょう？」
校医は、ええ、これなんですがね、と、手にしていた一枚の書面を夏代へ差し出した。
Ａ４サイズのコピー用紙である。
そこに汚い文字で次のように書かれていた。

『お前の娘の×××はお前の×××のように臭い』

　夏代は二度、その文章を読み返して、事態を理解しようとした。そして三度、目を通したあと、彼女は怒りで眉をつりあげて、校医を睨み付けた。男の身長は夏代より頭ひとつ大きいので、見上げる形になる。
　「これは何です？　まったく理解できませんわっ」
　しかし夏代の剣幕は校医の薄ら笑いを認めると尻切れトンボに終わった。
　「何って奥さん、その文章が間違ってるかどうか、これから確かめようって話だよ――」
　校医の声はまったく落ち着き払っており、取り乱したりはしていない。夏代は彼女の横で腕組みをしていた山崎を振り返った。山崎もまたこの状況の急変に冷静である。夏代はようやく二人は共謀しており、犯罪を企んで自分をここまでおびき出したのだと諒解した。

　この章の残りは有料本編でお読みください。
######

　第四章　本部収監

このＲ県の思想部本部に勤務する部員のうち、最も年齢の若いＤは、上司の命令を伝えるため本部の地下にある特別収監棟へ赴いた。直接、人間が行かなくとも、電話一本で事足りるのであるが、Ｄの向学のためにも、極秘事項の多い地下施設の概要を知る良い機会だと、上司は考えたらしい。

Ｄはエレベーターで地下へ下りると、案内標識に従い、フロアを収監棟の方へ歩いた。思想部に奉職して以来、ここを訪れるのは初めてなので、Ｄは興味津々だった。Ｄはまだ見習いに毛の生えた程度の、雑用の仕事しかやらせてもらえていない。反逆者の捜査や逮捕といった、思想部の華ともいえる仕事はもちろんのこと、尋問を覗かせてもらう機会すらなかったのだ。

特別収監棟といえば、逮捕者を拘禁し、詮議し、管理し、ときには矯正させるプログラムを執行する、重要な部署であった。それだけに部員と言えども自由な出入を許されていない場所でもある。そこを勉強して来い、というのだから、自分もようやくいっぱしの思想部部員の一人として認められようとしているんだな、と、Ｄは気分を昂揚させているのである。

廊下はすぐに厳重に施錠された鉄の扉に塞がれて行き止まりになった。そこで番をしていた制服部員に名前と所属を告げ、中へ入れてもらう。

「……」

収監棟へ一歩踏みこんだＤは重苦しい内部の空気に圧倒されてしまう。レイアウトは特に扉の向こうと変わってはいない。磨かれたエナメル質の廊下と白とグレーのツートンの壁、蛍光燈が埋めこまれた天井――ここだけ写真にとって一般人に見せて、大学病院の病棟の通路と説明しても疑う者は少ないだろう。しかし、空気は明確に違っている。地下数十メートルに建設された人工の空間は、四方からミシミシとかかってくる地圧に耐えるべく、ちょうど潜水球の構造になって、内部からも同等の圧力で押し返しているのだが、そのために詰められた酸素の分子のひとつひとつが極度の緊張を示し、膨脹している感じなのである。

いや、そういった物理現象のみが原因とは思われない。この空気には思想部部員の執念や気合い、情熱や苦悩が溶けこんでいるのではないだろうか。確信犯的な思想犯や暴力的な過激分子との昼夜に渡る闘いは膨大な精神力を要求されるのである。心臓を高鳴らせるような熱が、この収監棟には充満している。

壁に取り付けられているクロム鍍金された見取り図を見ると、収監棟は大きく分けて三つのセクションから成っているようだった。逮捕者を留置しておくセル部、矯正を担当するトリートメント部、そして尋問を補佐し、円滑に促進させるグリル部である。

Ｄはそのグリル部に用があったのだ。

異様な熱気に包まれた部屋がグリル部であった。１０人前後の部員がいると思われるが、ほとんどがワイシャツを腕まくりして、机に山と積まれたファイルケースと格闘しているようだった。煙草の煙が幾つも立ちのぼり、天井付近で合流して低い雲を作っている。電話のベルがひっきりなしに鳴り、またこちらから掛けている。活気に富み、精力が横溢した、まさに男の職場といった観である。

Ｄは一人の男を紹介された。彼もワイシャツを腕まくりしている。くわえ煙草に緩めたネクタイが勤労の度合いを示している。これで頭が剥げていなかったら、かなりのハードボイルドなのだが、頭髪は左右を残して後頭部まで後退しているのだった。年齢はまだ４０代後半だと思われる。彼はここの室長であった。

「聞いてるよ。ピクニックしたいんだって？　上もずいぶん暇なんだな」

煙に目を細めて煙草を灰皿に押しつける。『上』とはＤの所属する対策課のことであろうか。たしかにここから見れば、上にある。

「ま、とりあえず、見せてもらおうか、ファイルを。持ってきたんだろ、新しい『毛筆』のさ」

Ｄは頷いて脇に挟んでいたファイルを手渡した。

「部長の奴、勿体ぶって正体を明かさないで電話の向こうで笑ってやがるんだ。――さぞかし今度の『毛筆』

は大物なんでしょうねえ」
　冷やかし口調で室長はファイルをめくり始める。『毛筆』とは思想部で流通する隠語で、女性思想犯を指している。ちなみに男性思想犯は『万年筆』だ。
　口元に浮かべていた嘲笑の色合いは、最初のページへ目を通した瞬間、飛散した。
　「なにっ、上川貴文の女房を確保したって！」
　彼の大声はグリル部全体に響き、一瞬、室内の喧騒がピタリとやんだ。室長は座り直し、新しい煙草にせわしなく火をつけた。数人が自分の仕事を中断して駆け寄ってきた。室長の手で拡げられているファイルを肩越しに覗きこんだ。
　「間違いない。上川の女房だ！　へへへ、これはお手柄だぜ。部長が勿体ぶるのも無理ねえや！」
　ファイルに添付された写真を人指し指で叩きながら、室長は喝采をあげんばかりの上機嫌である。
　「しかし大丈夫ですかね」後ろから腕組みをして覗いていた若い部員が言った。「いくら『かんぱん』に落ちぶれたと言っても判事の身内ですよ。戦争になりませんかね？」
　『かんぱん』――司法界では簡易裁判所の判事をそう呼ぶ習慣がある。簡裁の判事になるには、実は絶対に司法試験を通らなくてはならない、という条件はないのである。大学で法律を教えていたとか、その他の用件を満

たしていれば、任命される場合がある。つまり、司法試験をパスしてきた人間には、一等低い裁判官と見做されるわけだ。
　『かんぱん』とは、だからその軽さを嘲笑した蔑称なのである。
　「どうして？　犯罪者を逮捕し、取調べるのになんの問題があるんだよ。裁判所も我々もそのために働いているんだ。文句なんて言わせねえさ。問題は女房が落ちるかどうかだろ？　もちろん、落ちる。いや、我々の総力を上げて落として見せましょうってさ！」
　室内に朗らかな笑い声が沸き上がった。
　上川貴文の名前を忘れた思想部部員は一人もいないだろう。全国に散る、全部員の記憶にその名前は残っている。忘れもしない『斉藤将志事件』――。泣く子も黙る、鬼の思想部に単身で弓を引き、一度は完全なる敗北を味わわせた、憎んでも憎みきれない敵、上川貴文。思想部の巻き返しによりエリートコースの地位を追われ、田舎の『かんぱん』に回されたとはいえ、その程度では思想部の失墜した威信は回復されはしない。とことんおとしめてやらなければ溜飲は下がらないのだ。
　「女房を獲った、ってのがいいねえ。痛快だねえ。本人を獲るよりも効果的だねえ。この美人なら当然、恋女房だろうし。腰を抜かしてるぞ、きっと」
　室長の快気炎はとどまるところを知らない。

「おい、この目標データをコピーして全員へ回せ。最優先で『カルテ』を作るんだ。今の仕事は中断してもかまわん。目標は手強いが、グリルの名誉にかけて、知恵を出せ！」
室長の号令に全員が「おう！」と呼応し、部員たちはさらなる熱気を帯びて、走り回る。これこそがこの特別収監棟の熱い空気の源なのだ。
「あの……」とＤは恐る恐る室長に尋ねてみる。
「『カルテ』といいますと？」
室長は初めとは違ってすこぶる機嫌がよく、Ｄにも対応した。
「うむ。つまり『処方箋』だな」
「『処方箋』ですか？」
「そう。目標の自供を促すための最も良いコンディションは何か、目標の性格、健康状態、家庭環境などをつぶさに分析・検討して、割り出していくんだ。カルテをベースに尋問の進め方や収監の方法を決定するんだから、重要だよ」
「そんなに違いますか？　人間によって？」
室長は、当たり前じゃないか、と、大袈裟に眉をあげる。
「たとえば、一口に『気が強い』といっても色々あるだろう。芯の強い気の強さ、とか、ただ頭に血を昇らせるだけの気の強さ、とか、理屈っぽい気の強さ、とか」

「はあ、なるほど」
「違う気の強さに同じ方法で攻めるのは合理的ではない。目標の心は城と同じだよ。攻略方法も城の特長によって変えなければ時間を浪費するだけ。我々は科学的にやらなければならんのだ」
目標の心は城、ね。うまいことを言うもんだとＤは感心する。
「とくに『毛筆』は微妙なんだな。『万年筆』に比べると倍は複雑な構造を持つ城と言える。分析もそれだけ時間がかかる」
「時間はあまりありませんよ。目標はそろそろ到着するはずです」
「わかってるよ」と室長はあごで部屋を指し示す。「だから全員で取り掛かってるわけだ。上川の女房となりゃ、徹夜だっていとわんぜ。完璧なカルテを作ってやるよ」
「とてもいいお話しを聞かせていただきました」
Ｄは一礼し、帰ろうとする。
「おい、せっかくだから他のセクションも回っていけよ。いい勉強になるぜ」
室長は直々に先導して歩きだす。Ｄは恐縮して後ろに従った。
グリル部の前の通路を、さらに奥へ進む。
「部外者が見学して一番喜ぶのがトリートメント部だ

ろう」
　そこの受け付けを室長は顔パスで横切ってしまう。『ギムナジウム』と札のかかった扉の前に来た。
　「君は運がいいぞ。ちょうどトリートメントの最中のようだ」
　室長はＤを見て片目をつぶった。
　「トリートメントって、治療とか矯正ってことですよね？　刑務所でやるんじゃないですか、普通は？」
　扉を開けながら頷く室長。
　「普通はな。しかし我々に言わせれば、一般の刑務所には残念ながら思想犯を教育するノウハウも設備も不足しておるのだ。思想犯の奴らには特別の愛情をもって接してやらなければならんのに、現状では、釈放後には再び仲間の元へ戻ってしまうケースがほとんどである。刑務所の限界は明白で、すみやかに我々内務庁が直轄する収容所を作らねばならんのだが、道は険しい。法律も変えんといかんし、そのためには我々を支持する政治家も増やさねばならん」
　扉を入ると小部屋があった。室長はその備え付けのロッカーの中から、布を取り出した。一枚をＤに渡して、彼は手元のそれを頭からかぶった。目と鼻だけが穴から覗ける頭巾であった。
　「自前の収容所を獲得するまでは次善の策に甘んじなければならない。トリートメント部は現状で我々が出来

る精一杯の方法なのだよ。ここで裁判の判決が出るまでの僅かな期間、徹底的に奴らに愛情を注ぎ、更生の道筋を刻んでおこうというわけだ。心にも肉体にもだ。まあ、あまりにも期間が短すぎて、目的は中途で終了してしまうケースが多いのだが――」

　Ｄも頭巾をかぶり、顔を覆い隠したのを確認すると、室長はギムナジウムに通じる扉を開けた。

　それにしても頭巾とは！　Ｄはどこか時代錯誤を感じ、その下で苦笑してしまう。

　（魔女狩り時代の拷問人みたいだな、これじゃ）

　顔を隠す――つまり逮捕し取調べをし、トリートメントに回されてきた連中に素性を知らせないための手段なのだろうが、果たしてここまでする必要があるのだろうか？　Ｄは質問したい衝動をこらえた。からかっていると受け取られる危険性がある。

　ギムナジウムと呼ばれる部屋は、体育館とまではいかなかったが、それでもかなりの広さを持っていた。その一面に多くの機械が置かれている。アスレチック・ジムでお馴染みの体操器具から、Ｄには見当もつかない、複雑な構造の鉄の塊まで、種々雑多な器具の見本市の様である。バネやクランクやハブやチェーンなどが組み合わさったメカニズムが油の臭いをプンプンとさせて剥き出しになっている機械――どう動くのかはわからなくとも、目的は想像できる。『万年筆』や『毛筆』は運動不

足の頭でっかちが多いから、そこらへんを鍛え直す道具に違いなかった。
　おりしも、二人が入ってきた出入り口からみて、正面の奥の壁際に並んだ、大小の鉄棒のゾーンで、それは行われているのだった。
　室長が言ったトリートメントとはあれだろうか？
　Ｄは好奇心で興奮する。
　近づくにつれ、匂いがきつくなってくる。人間の体臭だ。それも、生臭さの中に甘さが混じる若い女の汗である。
　１．５メートルくらいの高さの鉄棒に、全裸の女が猿のように逆さにぶら下がっていた。逆上がりの中間姿勢というべきか。両足をバーへかけて、両手もバーを掴んでいる――遠目にはそのように見える。
　その前の床に座り、見上げている上半身裸の男が一人いた。こちらに背を向けているため、顔はわからなかったが、その頭は角刈りで、白髪もまだらに混じっているようだった。
　「あの男はトリートメント部のベテラン部員だな。『桃さん』って呼ばれてる」
　室長はＤに耳打ちする。
　「彼は頭巾をかぶっていませんね？」
　「気合いが入っている証拠だよ。剥き出しの人間同士のぶつかりあいなのだ。トリートメントってのはな。そ

ういう哲学を持っているんだ」
　Ｄは納得し、感心する。室長はその桃さんに声をかけて近寄っていった。Ｄを指差して、上の有望な若手に少し見学させてやってくれ、と言った。振り向いた桃さんの顔はごつごつとして、目も鼻も硬い皮をかぶった肉の中に埋まりこんでいるような印象である。職人気質の彼はうるさげにＤをねめつけると、すぐに無視し、室長にだけ、かまいませんよ、とぼそぼそと答えるのだった。
　近くで観察すると、女は自身の力でぶら下がっているわけではなかった。
　（蟹縛りか――）と、Ｄは腕組みをしながら目を凝らす。
　肢体を折り屈めるように、左右の手首と左右の足首をそれぞれ細いロープで結ばれ――折り曲げて外側へ開いた両膝の中、股の間に両手を突っこむ格好――手と足で作られた微かな空間に鉄棒のバーが貫いて、彼女を吊っているのである。
　さらに正確には全裸でもなかった。胸乳のトップに絆創膏が貼られており、唇にも膏薬のようなテープが密着している。パンツは履いていなかったが、サラシのような白い布が陰部を隠し、尻の谷間に食いこんでいた。しかし彼女の身に付けているものは他にはなく、大部分の肉体が露出させられているのは間違いなかった。
　長い頭髪の持ち主で、逆さになった頭から垂れ落ちた

黒髪の先端は床をじゅうぶんに掃いている。
（なるほど、これは『毛筆』だわな）
Ｄは女の姿のエゲつなさに辟易としながら、そう思って肩をすくめた。
脂肪のついていない細い身体つきや、薄い胸からして、女はまだかなり若いように見えた。Ｄの嗅覚を刺激した体臭は、彼女の青白い肌をねばねばと濡らしている汗が原因である。口を覆っているテープのせいで、表情はあまりわからないものの、血が頭部に集中しているためか、顔面は紅潮していた。彼女が疲れ切っているのは、そのまばたきの鈍重な緩慢さからもすぐにわかる。朦朧とした意識を現すかのように、腫れぼったいまぶたと細い睫毛はどんよりと開かれるのだ。充血しきった白目に浮いた瞳は正面の桃さんだけをとらえ、傍らまで来ている新たな二人の客には気づいていないようだった。
桃さんはいきなり彼女の頭髪をつかんで、顔を持ち上げ、己の顔に近づける。彼の低く押し潰れた獅子鼻と、苦悩の皺を刻んでいる女の額が密着せんばかりだ。つまり、気力にみなぎり、気迫を噴出させている彼の眼光と、今にも掻き消えそうな女の視力とが、しっかりと見つめ合ったのである。
「ミナコ！」
桃さんはそう怒鳴りつけた。
「さあ、もう一度、やるんだ！」

　彼の岩をも吹き飛ばす剣幕に、ミナコと呼ばれた女は華奢な肩を怯え縮めている。それでも、なんとか自我を奮い起こし、拒絶の意志を顔を横に振ることで体現する。足の指が拳を握るように内側に曲がる。
　「なんだとおっ、ミナコ、貴様という奴はまだわからんのかあ！」
　あまりの迫力にＤですらいたたまれなくなるくらいだった。
　桃さんはミナコの髪を激しく揺さぶりながら唾を飛ばして怒声を叩き付ける。
　「脳ミソを筋肉にするんだよ！　鍛えるんだよ！　それ以外にお前が一般社会に復帰する道なんかないんだよ！　鍛えて鍛えて、脳ミソからチンケな思想を、皮下脂肪のように絞り取って、つまらぬことを考えない、真白な、赤ん坊のような脳ミソを取り戻すんだよ！　な、そうだろ、ミナコ！」
　激情に感極まるとはこのことだろうか。ミナコの頭髪を握ってゆすっていた桃さんは、やがて彼女に頬ずりを始め、言葉をとぎらせるのだ。本当に、そのおちくぼんだ小さな目から涙が滲んできたのである。
　「ああ、ミナコ、ミナコ――、お前のような純情な娘こそ、邪悪の反逆心から解放されて、普通の娘のように、花嫁修業をし、遊び、恋をし、結婚し、子供を産んで、幸せに暮らす生活を送らなければ、この世は闇だ。

この世界に明日はない。俺の望みはそれだけだ。それだけなんだよ、ミナコ、わかるよなあ？」
　怒鳴り声とは違う、静かな、悟らせるような口調で語りながら、その裏で、それまで首筋やあごを撫でていた桃さんの埃っぽい人さし指と親指とが、彼女の形のよい鼻をつまみ、鼻孔を塞いでしまった。ミナコの白い裸身は次第に酸素の断絶にもがき、のたうち、激しく波打った。
　「――わかるよなあ、ミナコ？」
　もう一度、桃さんはミナコの瞳をのぞきこむ。不自由な全身で、ミナコはガクガクと頷くのだった。
　「よーし、それじゃあ、始めるんだ。腹筋に集中して心を空っぽにするんだ！」
　桃さんはさっと飛び上がるように立ち上がり、壁に立てかけてあった竹刀を手にすると、その先端で、ミナコの引き締まった尻を小突いた。
　彼女が強制されているのは、その吊られたままの態勢から、自己の力のみで鉄棒を一回転するという、ただそれだけの運動であるらしい。単純な行為ではあるが、たしかに理性を喪失させるほどの集中力でもって、全身の筋肉を働かせなければ達成できない作業に違いなかった。口呼吸を封じられているミナコは鼻孔をいっぱいに拡げて酸素を肺にとりこみ、段になっている腹に懸命に力をこめて、腹筋を緊張させようと必死になっている。

ようやく、彼女は頭を前後にゆすり、その反動を利用して蟹縛りにされた小柄な身体を、徐々にではあるがブランコの運動にもっていく。

この章の残りは有料本編でお読みください。
######

第五章　医療精査室

代わりに背後の三人が無言のまま、夏代の正面と左右に分れて座った。如才なく笑顔を使い分けるＫとは違い、彼らは無表情で、ただじっと、夏代を見つめている。その視線の意味は観察、もしくは監視といった感が強いように思われた。
彼らは何も喋らないのである。焦れた夏代が先に口を開いた。
「――それで、私はもう帰ってよろしいのですか？」
「サインすれば帰ってもいいことになっている」
と、正面の男。なんだか言葉遣いが一ランク下がったような気がする。やれやれと、夏代は単身で組織と闘う深刻さに徒労感を覚える。
「サインはできませんが、子供が心配です」

「君の心配は関知しない。我々はすでに善処している」
「――」
（なんだろ、この男――）
ムッとした夏代は男を睨んでやった。年齢は自分より少し上だろうか。角刈りで精悍な目つきをしていた。どんな喧嘩にも勝てる、といった印象である。右の男は二十代半ばだろう。まだニキビの名残が顔にあるような若者だ。
（ヒヨッコじゃないの）
左の男は部長よりも年配そうであったが、それは髪に白髪が混じっているからだ。キャリア組でないのは明白で、四角い顔に現場で叩き上げてきた迫力が刻まれているようだった。
（町工場の社長だね、押し出しがきつそー）
夏代は自分を元気づけるためにも、人物評定をやってみる。
「弁護士は呼んでくださったのですか？」
「さあ、それはどうか」
「どうかって、どういうことです？」
「私はその担当ではない」
「ではその担当に早く連絡してください」
「その担当は他の仕事に出ているのだ」
「いつ戻ってくるのです？」

「仕事が終われば戻るだろう」
「だからその仕事はいつ終わるのですか？」
「私はその仕事については関知していないので、いつ終わるかなどわかりようがない」
夏代は呆れて沈黙した。彼らはまったくこちらの要求など興味を持っていないのだ。
「君は今――」と左側の男が口を開いた。「ヒステリー状態なのかね？」
「……いいえ、違いますが？」
「それが通常のテンションなのか？」
「冷静なつもりですけど」
「なるほど。よくわかった。もういい」
再び会話が途切れた。五分経過し、十分経過する。これは一体何を意味する儀式なのか。
「取調べはしないのですか？」
「弁護士が来るまで喋らないのだろう？」
「捜査をする気があるんですか？」
右側の若い男が口を挟んできた。「尿意はあるかね？」
「え？」
「尿意だよ。膀胱に圧迫はないかということだ」
「ありません」
「便意はどうだ？　腹部にこわばりは？」
首を振る夏代。

「催したら申し出なさい。トイレへ連れていってあげるから」
「あなたが？」
「ああ、そうだ」
「中を覗くんじゃないでしょうね？」
夏代は挑発するように言った。突然トイレの話を持ちだしてきたのは、一種の脅迫に違いないからだ。そっちがその気なら、こっちだって――。しかし男は平然として答えるのである。
「必然性がないかぎりはそういうことはしない」
「どういう必然性があるのです？」
今度は正面の男が口を開く。
「君には関係がないから心配しないでよろしい」
沈黙の時間。三十分、一時間、二時間……。昼時になった。このビルに連れてこられてから何時間がたっただろう。それでも一向に事態は進展していないように思えた。彼らはどういうつもりなのだろうか。
昼食にはソバが運ばれてきた。朝も食べていないので、少しは箸をつけないとと思ったが、やはり食欲はないのだった。三人の部員はマイペースできつねソバをすすっている。彼らと一緒に音を立てて麺を呑みこむのも抵抗感があった。仲のよい会社員のランチタイムのようではないか。憎んでもおかしくない敵なのである。
「昼食時だから担当の人も帰ってきているんじゃない

ですか？」
「担当？」
「弁護士に連絡する担当の方がいるんですよね？」
「我々の仕事に昼も夜もないのが普通だ」
「確認してもらえませんか？」
「その必要はない」
「どうして？」
三人は夏代を無視し、ソバを食らうばかりである。
午後に入ってもその調子は変わらなかった。男たちは何が面白いのか、飽くことのない視線を夏代に送り続けている。昨日のレイプ三人組とそれはさして違わぬ性質のようなものにも感じられて、夏代は次第に疲労が噴出してくるのだ。睡眠不足と暴力を受けた肉体の傷みが午後になって顕著に影響をしてきたのである。
（そうだ、私は病院へ行かなければならないんだわ）
夏代は妊娠の恐怖感を思いだした。女体のバイオリズムからいけば、それほど危機感はないものの万が一ということもある。早朝の連行劇ですっかり忘れてしまっていた。処置は早いほうがいいに決まっている。
「弁護士を呼んでください。いくらなんでも遅すぎます」
「遅いも早いもない。帰還は深夜になる場合だってある」
「では夫に電話をします。電話を貸してください」

「ご主人に事件を報告するのかね。オッパイ丸出し事件を」
「仕方がありません。夫には理解してもらえるはずです」
「障害者の唇を奪いましたってか」
「奪ってません。電話はかけさせて戴けないのですか？」
正面の部員は、いいや、と言って若い部員に電話を持ってこさせた。
（貴文さんならきっとわかってくれるし、助けてくれるわ）
そう自分へ言い聞かせる夏代である。電話はまず宿泊先のホテルへかけ、夫の居場所を確認した。夫は調査のため、ある事務所を訪れているらしい。その事務所の番号を教えてもらい、そこへかけ直すと、貴文はすぐに出てくれた。
「なんだ、お夏か、どうしたんだ？」
電話を通してではあるが、貴文の声が耳に飛びこんでくると、夏代は急にそれまでの緊張感がとけて熱い思いがこみ上げてくるのをどうしようもなかった。電話の回りには他人がいないのか、ニックネームで呼んでくれた優しい貴文――。
「あなた――」
そこまで言っただけで声が詰まってしまう。鼻の奥が

ツーンとして涙が溢れそうになる。声だけでなく、彼に会って抱きつきたいと切なく思った。
　事情を説明しようとした、そのとき、部屋の扉が開き、男性部員が走ってきた。すかさず正面の男に耳打ちし、書面を渡す。
　「どうした、夏代？　明日香がどうかしたのか？」
　心配げな貴文の声を聞きながら、夏代は男性部員たちのただならぬ気配に心を奪われてしまう。
　「いえ、そうじゃないの。あなた、ちょっと待って――」
　正面の男性部員が立ち上がり、夏代に向かってその文面を読み上げた。
　「上川夏代、たった今、裁判所が逮捕状の請求を認めたので、お前を、山本達巳に対する強制猥褻罪のかどで逮捕する。某月某日、午後〇時〇〇分。身柄を拘束して収監するのでそのつもりで」
　「――！」
　夏代は呆気に取られてしまう。当惑が精神を真空にした。こうした事態を予測しなかったわけではなかったけれど、いざ、その宣告を受けると、何か、他人事のような、実感のない、平和な町に突如ミサイルが落ちてきたような、不思議な気分に囚われるのだ。しかし部員たちの表情はどれも真剣で、彼らが準備しているのが手錠やロープであるのを確認すると、夏代はこれが夢でも冗談

でもドラマでもないのを悟るのである。
「――夏代？　夏代？」
状況を説明されないでいる夫は次第に苛立ち始めているようだった。
「貴文さん――」
悲鳴を上げてこの厄難を報せるべきだったが、夏代の声は囁きに近いものでしかなかったし、声を伝えるのはすぐに不可能になった。若手の部員に受話器を奪い取られたからだ。彼はそれを電話機へ戻した。貴文の声がシャボン玉のように掻き消えた。
彼女の意志などお構いなしに、男たちは両腕を左右から取り、胸の前で揃えるように重ねる。銀色の手錠の輪が華奢な手首にかけられた。その冷酷な感触に腕はもちろん、胸元から背中から太股から、全身に鳥肌が立つのだった。
「……これは……」夏代は声を絞りだした。「誤認逮捕だわ……」
辛うじてそう言うのがやっとの状態で、怒りとも屈辱ともいえる感情で頭がクラクラする。
「裁判所が認めたんだぞ。裁判官を信じないのか？」
正面の男がそうからかうと、他の部員たちも低い声で笑うのだった。
太いロープが人妻のジーンズの腰に厳重に巻かれていく。土佐犬でも拘引するような太さである。

「……きつい……」
しかも、呻きが口をつくほどの締めつけだ。
「きついほうが骨盤が締まって無駄な脂肪が付きにくくなるそうだぞ。出産した女には特に効果がある」
逮捕が完了したからなのか、部員たちは急に饒舌になったようで、口々に夏代を中傷するのである。たしかに、こうした非日常的な束縛の道具を付けられてしまうと、対等な人間関係の均衡が崩れ、厳格な上下の立場が剥き出すようだ。道具を操る者が尊大になり、身体の自由を奪われた者が卑小になる。いま夏代はその方程式に奥歯を噛みしめて耐えるしかなかった。どうしてもうつむいてしまうのだ。自分を囲んでいる男たちの顔を真正面から見られなかった。
その感情は歩きだすと、さらに鮮烈に募った。背後でロープを握った男が進路を修正するように力を加えて引き絞ったり、緩めたりするのだが、それは夏代の尊厳を傷つけるのにじゅうぶんな『手綱さばき』ではないか。前を先導する大きな男の背中は視野を限定し、圧迫感を覚えさせる。左右の男――逮捕状を持ってきた部員も連行に参加している――は、昨日、レイプ犯たちに何百回も鷲づかまれて内出血さえ起こしている、柔らかな二の腕を、指を食いこませて握り、彼女に苦痛を味わわせた。
女一人に男四人――物々しく廊下を歩かされる気分は

最低だ。反対側から歩いてくる人間に出会うと、夏代は本能的に身も心も萎縮させている自分に恥辱を感じた。これではまるで自分から罪を認めているような態度ではないか。

以下は有料本編でお読みください。
######